

東北地方太平洋沖地震による 緊急消防援助隊の活動記録

平成23年3月11日～20日



高槻市消防本部

はじめに

この災害の犠牲になられた方々に対し、高槻市消防職員一同、謹んでご冥福をお祈りし、心より哀悼の意を表します。

この記録は、平成23年3月11日14時46分、東北地方の太平洋三陸沖で発生した「東北地方太平洋沖地震」に伴う、緊急消防援助隊大阪府隊に編成された、高槻市消防本部の派遣隊員の活動を記録したものである。

【地震の概要】

1	発生日時	平成23年3月11日 14時46分頃
2	震央地名	三陸沖（北緯38.1度、東経142.9度）
3	震源の深さ	24Km
4	規模	モーメントマグニチュード 9.0
5	震度	宮城県栗原市の震度7を最高に、千葉県以北の広い範囲で震度6弱以上を記録
6	津波	3月11日14時49分 大津波警報・津波警報の発令された全国の太平洋岸の主な検潮所で観測した津波の観測値 ・えりも町庶野 11日15時44分 3.5m ・宮古 " 15時26分 8.5m以上 ・大船渡 " 15時18分 8.0m以上 ・釜石 " 15時21分 4.1m以上 ・石巻市鮎川 " 15時20分 3.3m以上 ・相馬 " 15時50分 7.3m以上 ・大洗 " 16時52分 4.2m <u>* 3月23日14時（気象庁調べ）</u>

【被害の状況】

1	人的被害	死者 15,810人 行方不明者 4,613人 (8/11 現在、総務省消防庁より)
	* 消防職員	死者 20名、行方不明者 7名 (5/16 現在、総務省消防庁より)
	* 消防団員	死者 210名、行方不明者 35名 (8/10 現在、総務省消防庁より)
2	物的被害	全壊 112,975棟 半壊 145,375棟 一部破損 539,899棟 (8/11 現在、総務省消防庁より)
3	火災発生	287件 (8/11 現在、総務省消防庁より)
4	その他	福島県の東京電力福島第一原子力発電所において、原発事故が発生。 その他各地で石油製造・貯蔵所等で、火災・漏洩事故が発生。

【緊急消防援助隊】

- 1 派遣隊数 延べ 27,544 隊
- | | | | |
|---------|-----|-------|-------|
| 大阪府隊 | 延べ | 146 隊 | 928 名 |
| 高槻市消防本部 | 第一陣 | 5 隊 | 20 名 |
| | 第二陣 | 交代要員 | 18 名 |
- 2 派遣人員 延べ 104,093 人
- 3 派遣状況 3月18日11時現在・・・1,558 隊 6,099 人
4月 4日11時現在・・・ 365 隊 1,283 人
- 4 活動場所 大阪府隊
岩手県上閉伊郡大槌町
- 5 その他 福島県の東京電力福島第一原子力発電所には、核燃料の冷却のため、東京消防庁はじめ全国の政令市から出場した消防隊が放水任務にあたった。



【高槻市消防本部 主な活動概要】

3月11日(金)

- ・緊急消防援助隊大阪府隊第1・2次編成部隊として出発

3月13日(日)

- ・岩手県遠野市に到着 遠野運動公園に活動拠点を開設
- ・大槌町桜木地区で検索救助活動
- ・釜石市で救急搬送活動
- ・緊急消防援助隊大阪府隊第6次編成部隊出発(交代要員)



3月14日(月)

- ・大槌町山林火災消火活動
- ・大槌町上町・末広町で検索救助活動
- ・釜石市で救急搬送活動
- ・遠野緑峰高校に活動拠点を移設
- ・第6次編成部隊現地到着 第1・2次編成部隊現地引き揚げ

3月15日(火)

- ・新田地区で検索救助活動
- ・大槌町で救急搬送活動

3月16日(水)

- ・赤浜地区で検索救助活動
- ・釜石市で救急搬送活動

3月17日(木)

- ・末広町で救急指揮活動

3月18日(金)

- ・新町地区で検索救助活動
- ・釜石市水難救助出動(誤報)



3月19日(土)

- ・現地引き揚げ

3月20日(日)

- ・全隊消防本部帰還



東北地方太平洋沖地震に係る緊急消防援助隊高槻市消防本部出動時系列

日	時	内容	
3月11日	14時46分	「東北地方太平洋沖地震」発生	
	15時00分	高槻市消防本部内第1次出動部隊に準備指示	
	15時10分	北ブロック各消防本部に情報提供（出動の可能性有）	
	15時30分	出動可能隊数の報告依頼（大阪市消防局）→北ブロック各消防本部へ連絡（FAX）	
	15時38分	出動可能隊数報告	
	16時45分	和歌山県への出動準備要請（大津波警報）	
	18時35分	総務省消防庁から大阪府隊出動要請 関東方面への出動情報受信（有線電話・大阪市消防局）	
	18時51分	出動要請（大阪市消防局：有線電話）	
	18時52分	第1次編成部隊 様式1（集結場所等の連絡）FAX着信→北ブロック各消防本部へFAX送信 集結場所：万博公園東駐車場（20:30集合）	
	19時00分	集結場所要員消防本部出発（警備3 警備課2名） 第1次編成部隊消防本部出発（西T1 5名・中R1 5名・富田A1 3名 計13名）	
	19時34分	第2次編成部隊 様式1（集結場所等の連絡）FAX着信→北ブロック各消防本部へFAX送信 集結場所：万博公園東駐車場（22:00集合）（後方支援部隊は大阪市消防学校）	
	20時44分	大阪府隊第1次編成部隊（60隊245名）集結場所（万博）出発	
	21時10分	第2次編成部隊消防本部出発（警手P1 5名）	
	21時30分	後方支援部隊消防本部出発（北5 2名）	
	22時32分	大阪府隊第2次編成部隊（32隊126名）集結場所（万博）出発	
22時52分	大阪府隊後方支援隊（13隊34名）集結場所（大阪市消防学校）出発		
3月12日	7時30分	大阪市消防局から交代要員についての調整連絡	
	8時00分	第2陣（第6次編成部隊・交代要員）の派遣決定（大阪府隊） 集結場所：名神高速草津PA（大阪府隊16:30）・万博公園南第2駐車場（北ブロック15:00）	
	8時40分	総務省消防庁から出動先の指定（岩手県）	
		第1・2次編成部隊	第6次編成部隊（交代要員）
3月13日	3時00分	岩手県遠野市活動拠点到着（遠野運動公園）	
	6時30分	岩手県大槌町へ全隊出動（捜索救助）	
	13時00分	消防本部集合	
	13時27分	消防本部出発（中5・警備5 5隊 18名）	
	13時30分	集結場所要員出発（警備3 警備課2名）	
	14時42分	富田A1 県立釜石病院～県立遠野病院	
	15時17分	北ブロック集結場所（万博）出発	
	17時00分	大阪府隊集結場所（草津PA）出発	
	21時40分	全隊活動拠点帰還	

日	時	内容	
		第1・2次編成部隊	第6次編成部隊（交代要員）
3月14日	3時25分	大阪府隊山林火災出動（西T1）	
	8時15分	出発（中R1・磐手P1・富田A1）（搜索救助）	
	9時20分	富田A1 DMAT搬送（釜石競技場～県立釜石病院）	
	10時50分	富田A1 釜石サッカー場（ヘリP）～県立釜石病院	
	13時50分	富田A1 県立釜石病院～釜石サッカー場（ヘリP）	
	14時46分		遠野市活動拠点到着
	14時57分	富田A1 釜石のぞみ病院～県立遠野病院	
	15時00分	運用連絡会議開催（大阪市消防局）	
	16時50分	西T1 帰還	
	17時00分		大槌町活動現場合流・引継ぎ
21時30分	中R1・磐手P1・富田A1 活動拠点帰還		
3月15日	0時20分	現地引揚（北ブロック）（中5・警備5）	
	9時30分		全隊出発（大槌町・搜索救助）
	12時10分	富田A1 大槌高校（救護所）～盛岡赤十字	
	23時30分	全隊 活動拠点帰還	
	22時56分	消防本部隊帰署	
3月16日	9時00分	富田A1 県立釜石病院～県立遠野病院	
	11時30分	富田A1 県立釜石病院～県立遠野病院	
	12時00分	中R1 出発（大槌町・搜索救助）	
	19時30分	中R1・富田A1 活動拠点帰還	
3月17日	12時00分	富田A1 出発（大槌町・搜索救助）	
	15時00分	運用連絡会議開催（大阪市消防局）	
	19時30分		富田A1 活動拠点帰還
3月18日	3時15分	第3陣（第8次編成部隊 交代要員）派遣中止決定	
	8時00分		中R1・西T1・磐手P1 出発（大槌町・搜索救助）
	9時30分	富田A1 釜石市水難救助（誤報）	
	11時00分	運用連絡会議開催（大阪市消防局）	
	19時45分		全隊 活動拠点帰還
3月19日	10時30分	現地引揚	
3月20日	6時45分	消防本部帰署	

【緊急消防援助隊出場者名簿】

大阪府隊第1・2次編成部隊

消防隊(西タンク1)

北消防署西分署	消防司令	森 正 樹
北消防署	消防士長	高 穂 晃 貴
北消防署西分署	消防副士長	佐 竹 直 樹
北消防署	消 防 士	乾 裕 佐
北消防署西分署	消 防 士	杉 本 優 太

消防隊(磐手ポンプ1)

北消防署磐手分署	消防司令	前 田 昌 宏
北消防署磐手分署	消防司令補	谷 川 誠 司
北消防署磐手分署	消 防 士 長	山 本 文 男
北消防署磐手分署	消 防 士	東 和 志
北消防署	消 防 士	皆 吉 直 登

救助隊(中救助1)

中消防署	消防司令	長 東 幸 仁
中消防署	消防士長	村 上 典 章
中消防署	消防士長	小 寺 大 介
中消防署	消 防 士	日 高 光 久
中消防署	消 防 士	松 永 尚 也

救急隊(富田救急1)

中消防署富田分署	消防士長	小 鷹 博
中消防署富田分署	消防士長	根 来 忠 則
中消防署富田分署	消防副士長	森 脇 浩

後方支援隊(北5)

警備課	消防司令補	松 尾 邦 幸
警備課	消防士長	坂 上 紀 之

大阪府隊第6次編成部隊

消防隊(西タンク1)

北消防署西分署	消防司令	山 下 勝 志
北消防署磐手分署	消防士長	山 口 直 己
北消防署西分署	消 防 士	木 村 稔
北消防署西分署	消 防 士	新 田 康 貴

消防隊(磐手ポンプ1)

北消防署磐手分署	消防司令	岡 田 隆 志
北消防署磐手分署	消防士長	中 野 信 次
北消防署	消 防 士	木 下 幸 三
北消防署	消 防 士	大 道 健 太

救助隊(中救助1)

中消防署	消防司令補	宇 野 武 志
中消防署	消防士長	山 下 圭 司
中消防署	消防士長	岸 田 優 一
中消防署	消 防 士	坂 口 周 平
中消防署	消 防 士	長 谷 川 明 生

救急隊(富田救急1)

中消防署富田分署	消防司令補	向 井 隆 之
中消防署大冠分署	消防司令補	清 水 広 伸
中消防署	消 防 士	道 本 靖 博

後方支援隊(北5)

救急救助課	消防司令補	河 股 恭 生
警備課	消防士長	濱 田 啓 二

【東北地方太平洋沖地震緊急消防援助隊 出場隊員活動手記】

消防隊員

私は平成23年3月11日に起きた、東北地方太平洋沖地震にかかる、大阪府緊急消防援助隊に偶然にも参加し、被災地である岩手県釜石市、大槌町へ先遣隊として派遣されました。

私は、2004年の新潟中越地震や2005年のJR福知山線脱線事故の際に、助けを必要としている人のもとへ赴き活躍する緊急援消防助隊の姿をテレビを見て、感動し、尊敬し、より一層消防士への憧れを抱きました。そして、いつか自分も消防士になり、機会があれば力になりたいと思っていたので、今回の派遣が決まった時には嬉しく思いました。

震災発生時私は、充員先の西分署で地震体験車の取り扱い訓練をしていたため地震が発生していたことを知りませんでした。私たちは「もしかしたら緊援隊の要請がかかるかもしれない。」との内線があり初めて地震の事を知りました。それから緊急消防援助隊の出動準備品や個人の用意等を、慌てて準備しました。その後、正式に出動要請があり大阪府隊の集結場所である吹田市の千里万博公園で集結し、「東京方面へ向かう。」という指示のみを得て出発しました。

大阪市消防局の指揮支援隊の先導のもと、大阪府隊として消防車両は数十台にもなる大規模なものでした。途中、何度かの休憩と給油時間を挟み、東京方面へ向かいました。狭い消防車両の中での長時間の移動と、目的地がはっきりせず、いつ到着するのか分からない状況が続き、非常に疲労感を覚えました。そして、そのような状況の中、関東地方に入る頃に「宮城、岩手県方面へ向かう。」との支持を得ました。私たちは首都高速を経て、東北道を北上しました。路面状態が悪く、一般車両の通行は止められていました。路面に気を使いながらの走行は被災地への到着を遅らせ、機関員の体力、集中力を一層奪いました。

出発から25時間ほどが経過した頃、目的地は岩手県の釜石市ということが判明し、最後のサービスエリアで給油と休憩をとりました。そこは既に停電状態にあり、給油所も非常用の発電機を使用しての給油となりました。そんな中、私たち消防隊員のために、サービスエリア職員の方が、うどんとおにぎりを用意してくれました。暗闇の中、テーブルに口ウソクを立て食べた、少しぬるいうどんとおにぎりは、今までに食べたどのうどんよりも美味しく感じました。それからまた5時間ほど経った頃ようやく私たちが寝泊りする野営地に到着しました。時刻は夜中の2時頃でした。私たちは夜明けと共に出発できるよう準備を整え、仮眠をとりました。夜が明け被災地へ出発しましたが、少しでも早く到着し被災者の救助へ向かいたいという気持ちがあるものの、その道中には、避難してきた人達の駐車車両や、津波で流されてきた物があったり、通行は困難なものでした。

ようやく目的地である釜石市に到着し、私たちが見た世界は本当に悲惨なもので、民家は流され、川には何台もの車、木の上には船が引っかかっている。まるで、街が洗濯機で掻き回されたようでした。そのような風景を目にしながら歩いていると、下を向き、涙を浮かべながら歩く被災者の方とすれ違うことができました。そして、すれ違い様に「有り難うございます。」と私たちに言いました。胸が熱くなりました。自分にできることを、精一杯しようという思いがより強くなりました。

到着すると、私たちの活動は津波の被害を受けた家の安否確認と人命検索でした。倒れた家具

や冷蔵庫等の大きな物の下敷きになっていないか、見落とすことのないよう、一軒一軒慎重に行いました。良いのか、悪いのか私たちの検索した家からは要救助者は見つかりませんでした。日が暮れ、1日目の活動を終了し野営地へ戻ると、後方支援隊がテントを建て、温かい食事を用意してくれていました。何時間も温かい物を口にしておらず、足を伸ばして横になっていない私たちにとっては本当に有り難いものでした。そして、身に染みて後方支援隊の重要性を感じました。同時に、未だ避難所で満足な食事を取れていない人がいることを思うと胸が詰まる思いでした。食事をとると、私たちは床に就きました。しかし、それから2時間ほど経った午前3時頃に、私たちタンク隊は突然起こされ、山火事が発生しているため消火に向かうよう指示されました。すぐに出発し、到着してみると、やはり山火事が発生しており、津波の被害を受けていない民家に燃え移りそうになっていました。水利は海から海水を吸い揚げ、ホースカーでホース延長、さらに足りない分は手びろめで延長し、ジェットシューターとの併用で消火にあたりました。その間、津波注意報発令との情報があったため避難、待機したり、突風が吹いたりして活動は難航しましたが、地元消防団の協力もあり、夕暮れまでには無事鎮火することができました。

私たち消火隊以外は、この日も前日につづき安否確認と人命検索を行い、命を落とした人を多数発見しました。しかし、多くの遺体が発見される中で、震災から90時間以上経過し、凍えるような寒さでもなお生きていた女性を1名発見しました。この知らせを聞いた時は消火活動をしていた私たちも、大阪府隊の一員として非常に嬉しく思いました。そして、少なくともこの1名は私たちが救助に来なければ失くしていた一つの命なのだと思うと、それまでの疲労感や苦勞はなくなりました。

最後に、今回の派遣の反省として、私なりに感じ、改善すれば良いと感じたことは、まず、山火事の際に使用したホースや筒先、分岐管、ホースバンド等、どこの隊の持ち物が分からなくなっていたため、出動準備の要請があった時点で資器材にそれぞれの隊名を記しておく、現地での活動の際に余計な気を使う必要がないだろうと思いました。次に、人選についてです。私はタンク隊として出場したのですが大型車両の運転免許は持っておらず、機関員をすることができませんでした。非常に歯がゆい思いでいっぱいでした。想定を超えた場所への派遣でしたが、隊員の体力の為に、安全管理面に於いても、機関員の数はできるだけ多いほうが良いと思いました。また、出動してからはほとんど情報が入らず、どのような状況になっているのか全く分からなかったため、災害用のラジオやポータブルテレビ等の通信機器があれば便利だと思いました。そして、現地では携帯電話等の使用ができないことが多いため、家族等への連絡や、今どのような状況にあるのかという様な情報を伝える制度があれば良いと思いました。今回、私は出動前に「支援隊として東京方面へ向かう。」とだけ家族に連絡して出発しましたが、実際は岩手県でした。しかし、私の同期の者が目的地が変更したことや、いつ頃帰宅する、といった連絡を家族にしてくれていました。私が家に帰宅した際、その連絡にどれほど安心させられたか聞かされました。

今回の派遣を経験し、私は緊急消防援助隊について全くの勉強不足だと感じました。近年増え続け、毎年のように起こる自然災害に備え、今後、緊急消防援助隊の役割は益々大きなものになると予想されます。経験を重ね、反省を基に、あの時こうすれば良かった、あれを用意しておけば良かった、というような、後になって後悔することのないよう、普段から様々なことを想定し勉強しておくことが大切だと思いました。また、今回参加できたことは、私の中で非常に大きな

財産となりました。この経験を自分のみに留めるのではなく、先輩、後輩等、周囲の人々にも思ったこと、感じたことを伝えていきたいです。

消防隊員

日本国にとってかつて無い未曾有の災害をもたらした今回の震災に緊急消防援助隊の第一陣として参加させて頂いたことは、私の今後の消防人生において貴重な経験であり、ありがたく思っています。また、この経験をもとに今後の消防人生に活かすことが出来るよう自己研鑽するとともに、今思うところを書き記したいと思います。

発災当時、東北地方での震災であり、大阪府への緊急消防援助隊の出動要請は、かからないのではと私自身安易に思っていました。しかし、メディアを通して映る光景を目の当たりにした時、被害の規模、状況から安易な気持ちは消え去るとともに、すぐに私は出動準備にとりかかりました。

大阪府の緊急消防援助隊、第一次隊として吹田市の万博集結場所を出発したのは、発災当日の二十時五十分。全隊で六十七隊、二百六十六名が各消防車両に分乗し、国から指示を受け、一路東京方面へ向かうことになりました。サイレンを吹鳴し、赤色燈を点灯し、一列に隊列を組んで行進する様は壮観であり、これから被災地での災害活動を行う我々にとって、士気の高揚になったものと思われま

す。被災地に向かう道中、高速道路のサービスエリアなどで幾度か燃料補給を行いました。車両の多さゆえ給油に長時間を要するのは、一刻も早く被災地へ赴かなければならない我々にとって、如何なものかと思いました。先々、集結が必要な場所を決めておけば、ブロック単位など小規模の部隊で行動するほうが時間のロスは最小限で止めることができたのではなかったかと思

います。名神高速道路、東名高速道路を通り、震災の影響で途中の静岡インターチェンジを出て、一般道路から現在建設中の第二東名高速道路に入りました。特に第二東名高速道路の状況は、未舗装や段差のある路面が殆どで速度をあげて走行することは出来ず、街路灯もなく、真っ暗なトンネルをいくつも抜けながらの真夜中の走行で、各隊員にも大変負担のかかるものでした。

第二東名高速道路を出る直前に小隊長全員に招集がかかり、府隊長から東北地方へ向かう旨の指示がありました。具体的な目的地は示されず、休む間もなく朝日に照らされた富士山の見送りを受けながら再び走り始めました。都心を抜け、一般車両が通行止めの東北自動車道に入りました。福島県内に入ると地震の影響で急に路面状態は悪化し、段差や地割れで行く手を阻みます。地震の爪あとを目の当たりにし、この時初めて今回の地震の凄さを実感しました。思うように前に進めず、ようやく宮城県を通過し、岩手県に入ったのは十二日の二十一時十五分、二次隊と合流すべく前沢サービスエリアで燃料補給と遅い夕食を兼ねての休憩となりました。万博を出発してから二十四時間以上が経過しており、この間、車両の運転は資格の関係から私を含め三名で交代しながらの緊急走行であり、あまつさえ乗組員全員一睡もしていない中、皆に目をやるとさすがに疲労の色は隠しきれずにいましたが、被災地で我々の到着を待ち望んでいる人々がいることを考えると、改めて気持ちを引き締めなければいけないと自分に言い聞かせました。

震災の影響で電気の供給は止まっており、ろうそくを灯しての食事でした。ここで頂いたおにぎりや温かいうどんはおいしかったです。考えてみれば一日半以上まともな食事を摂っていなかったため、なおさらここでの食事は身も心も生き返り、とてもありがたかったです。食事を摂り終えて間もなくして後続の第二次隊、三十七隊百三十七名が到着し、第二次隊の休憩後、各小隊長が集結し、府隊長から今後の予定が発表され、岩手県釜石市と大槌町での災害現場活動の実施と、それに備えて今から野営地である岩手県遠野市の運動公園に向かうという内容でした。

その後、全隊で百四隊の大集団が野営地に到着したのは、十三日の深夜三時でした。到着後すぐに小隊長が集められ、ミーティング後テントを張る間もなく、明るる日に備えて僅かな仮眠を車内で取りました。

その日の朝六時に全員起床し、眠たい目を擦りながら朝食後、災害活動に赴くため準備に取り掛かりました。その当時、大槌町への消防車両の乗り入れは出来なかったため、各自必要な資器材を手に持ち、人員搬送者に乗り込み、途中の釜石市で集結、先発した救助隊からの情報を待つて大槌町へ向かいました。野営地から釜石の市街地まで五十数キロ、そこから被害のあった海岸沿いの道路は通れなかったため、迂回して山道を通り現地へ向かいました。しかし、一般車両も通行していたため渋滞してなかなか進めず、現地の三キロ手前からは通行止めのため車を降りて資器材を手に持ち徒歩で向かいました。一般車両の通行規制をしていれば、少しでも早く現地に到着できたと思います。

大槌町は、十三日に我々大阪府隊が活動するまで、災害活動は手付かずのところ、その惨状を目の当たりにした時、一瞬足がすくみました。海岸から山の目に見える住宅地まで、距離にして五キロほどが、あたり一面いわゆるガレキの山です。所々住宅の形は残っているものの津波にのまれ、家内は泥にまみれた廃墟ばかり。二日前まで人が生活を営んでいた所とは到底思えない惨いありさまでした。

「どこから手を付ければよいかわからない。」そんな状況の中、我々は指揮本部の命により、救助隊と共に比較的住宅の原形を留めている城山と小槌川に挟まれた桜木地区で、人命検索と安否確認の活動に入りました。

活動中七十代の男性に尋ねたところ「表の通りで近所のばあさんと話をしていたところを津波にさらわれ、何処へ行ったのかわからない。」と、目にうっすら涙を浮かべながら話してくれました。幸せに暮らしていた老夫婦に突然訪れた不幸を思うと心が痛くなりました。

他の活動隊も懸命の検索活動を行ってはいるが、生存者は発見できず、次々に発見する遺体がある場所に目印として棒に赤い布を巻いていく活動が続き、その後、津波警報が発令されるなど、時折中断することもあり大変な活動初日でした。

その日の活動が終了し、野営地へ戻ると後方支援隊が食事とテントを用意してくれていました。疲れた体を癒してくれ、本当にありがたかったです。その日の最終ミーティングを終え、明るる日も引き続き検索活動となり、今夜は少しゆっくりと休めると思いながら、時計に目をやると二十三時四十五分、しばし仮眠に入りました。

休んで間もなく十四日の深夜三時、野営地の指揮本部から林野火災の出動要請がかかりました。大槌町付近の山林で火災が発生し、人家に燃え移ろうとしているので、地元の消防団と協力して活動を行ってほしいという内容でした。

ちなみに指揮本部で指揮活動を行っているのは、大阪市消防局の南方面隊の方々に、私が以前、指揮隊研修でお世話になったところです。お互い顔見知りで気心も知れていることもあり、指揮隊の判断で、山林の多い高槻市消防本部に今回の林野火災の消火活動をお願いしたいというありがたい言葉を頂き、他に2隊の消火隊と共に暗闇の中を出発し、現場へ向かいました。

大槌町と釜石市を結ぶトンネル付近で暗闇の中、蛇のように長く続く明るい炎に照らされて、数件の民家が立ち並んでいるのがわかり、炎は少しずつ民家に近づいています。水利は無く、先に消防団がジェットシューターによる消火活動を行っており、我々の隊はジェットシューターに消火水を補給する作業から始まりました。



その後、火災の規模から消火隊が増強され、明け方以降は消火ヘリも増強され、我々も転戦しながら消火活動を続けた結果、

十五時過ぎにようやく鎮火しました。人家には燃え移ること無く、消火活動を行っていた各隊員は疲労の中にも安堵の顔を浮かべ、現場から引き揚げました。

野営地に戻るとテントなどがそこには無く、野営地を岩手県立緑峰高校に移されており、後方支援隊からの情報で、第二陣が交代要員としてこちらに向かっており、第一陣の疲労を考慮し、今夜はここに第二陣と一緒に泊まって、明日大阪へ引揚げるという内容でした。

今夜こそゆっくり休めると思っていたのも束の間、第二報が入り、第二陣が大槌町の現場で第一陣の本隊と引継ぎを行っており、野営地に到着次第、荷物を整理してすぐに帰阪するという内容でした。

情報が錯綜する中、第一陣の小隊長が集められ、結局指揮本部から帰隊命令が下り、各ブロックで帰隊準備にかかってほしいという内容でした。隊員たちの疲労度はピークに達しており、ブロック長として、一言言いたかったのですが、第一陣の大半は引継ぎの場で帰阪する指示がやはり出ていたらしく、今更私の思いなど通じるわけも無く、すぐに帰らざるをえない状況でした。指揮隊から事前に少しぐらい相談があっても良いのではないかと、活動していた隊員たちのことを考えると、一晩でも休まないで健康上や安全管理上の問題もあり、事故があつてからでは遅いと思っていました。所属からも電話が入りましたが、この状況ではどうすることもできず、自分自身歯がゆく、苛立ちと憤りさえ感じました。

他のブロックでは指揮本部へ詰め寄る方もおられましたが、ここで何を言っても仕方ありません。今は北ブロックを一つにまとめ全員無事帰任すること、それだけを考えていました。幸い当市消防本部の各小隊長が、帰りのバスの人員の振り分けなど上手に取りまとめてくれたおかげと、各機関員の安全運転により、最後まで事故無く全員無事帰任でき、それぞれ帰宅できたことは何よりだったと思います。

被災地で一番不便だったことは「トイレ」です。男性もさることながら女性ならなおさらのこ

と思います。今回、大阪府隊の中に女性消防吏員はいませんでした。が、難しい問題だと思いますが、検討課題ではないでしょうか。

最後に、今回の派遣を通して感じたことは、常に正確な情報を収集、発信するために、ブロック代表とは別に現場指揮・支援本部に上級職の方を配置する必要があると思いました。情報が錯綜することも多く、私自身、災害現場活動や小隊長等のミーティングで時間もなく、今回、電話交信が行える場所も限られており、衛星電話は後方支援隊に預けるなどしましたが、今後もどのような場所で災害活動を行うかわからないと思いますので、ご検討頂ければと思います。

長々と書き記しましたが、今後の災害活動の参考になればうれしく思います。

救助隊員

このたび私は高槻消防から緊急消防援助隊の第一陣で参加させていただき、大変貴重な体験をさせていただきました。地震発生後約2時間で万博公園に集結せよとの命であったため、持ち物の準備は勿論のこと気持ちの準備もできないまま現地に向かうことになり、やはり防災職員は何時いかなる時にも有事の際に備え常日頃から準備しておかなければならないと反省しました。

万博公園に集結し、そこから出動していく時、車両が一列に並び隊列を組んで走って行く時はとても気持ちが高鳴っていました。しかし実際に被災地の状況も、目的地もわからないまま東に向いて走っている時は不安な気持ちで一杯でした。隊列を組んで走行するのは、前方の車両と一定の距離を保ったまま走行しなければならず、自分のペースで走ることができないので、非常に神経を使い、また全車両赤色灯を点けたままの走行なので目が非常に疲れしました。消防車両は高速走行でも非常に燃費が悪く、サービスエリアごとに給油しなくてはならず、また東北道に入ると震災の影響で道そのものが隆起や陥没していたので走行に支障をきたし到着したのが出発から約30時間後でした。やはり少しでも早く被災地に着くため、給油する場所を各ブロックで分けたり、悪路対策を考えた出場車両の選定や人員搬送車などに変えていく事、燃費向上のため6速まで変速機能を持つ車両の運用も検討していくべきだと思われまます。

東北に入ると何度か余震を体験し被災地に着いた実感が湧いてきました。余談ですが私の持っている携帯電話に今まで聞いたことのない音が流れてきて確認すると「緊急地震速報」のメールが入っており、しばらくすると地震が発生しました。地震が事前に来るといふ知らせは心の準備ができて揺れ始めの初動体勢をとるのに役立ちました。



岩手県は予想以上に寒さが厳しく夜中はマイナス5℃位になっていました。少しでも動かさないと、体がすぐに冷え切ってしまうので常に現場外套を着て行動していました。夜就寝するときはエアータントの中に簡易ベットを置きその上に寝袋で就寝したため大変寒い思いをしました。今後、寒冷地へ行く際の防寒対策も考慮しなければならないと思います。また苦労した事は水道が止まっているため十分に手が洗えず飲料水等で手を洗っていたのですが、最終日まで十分に汚れが落とせなかった事です。日頃当たり前の様に生活している事がこんなにも有難いものなんだと思ひ知らされました。

次の日の夜中に野営キャンプする公園に到着し、タンク車の中で3時間ほど仮眠し翌日から現場活動に参加しました。1日目は安否確認作業に従事しました。大槌町の惨状は船が山の上に横たわっていたり、線路の上に家の二階部分だけが乗っていたり、車が木の上に引っ掛かっていたりで現実のものとは思えない信じられない光景でした。また山火事と建物火災も発生していました。この場所に以前は何があったのか全くわからない光景でした。見渡す限りの瓦礫の山で我々に一体何ができるのだろうか？この中に何人くらいの人がいるのだろうか？最初は使命感よりも絶望感のほうが勝っていたのが正直な気持ちです。しかし被災地や釜石消防の人達の顔を見てみると胸に込み上げてくるものと、この人達の為に少しでも役に立たなければという思いになり、全力で頑張っていこう！という気持ちになりました。安否確認作業は大阪市消防局指揮の下でエリアを割振りされローラー作戦で行いました。しかし思っていた以上に津波の影響は大きく家の中は流れてきた瓦礫と家具などでごった返しているし、地面に泥が覆っていて普通に歩くことも難しく又、余震で家が倒壊する危険等で活動に支障をきたし思っていたより満足な活動ができませんでした。幼稚園の園内を検索した時、幸いにも人はいなかったのですが、泥だらけになった遊戯室、教室、子供用のトイレを見ていると本当に辛くなりました。

指揮本部で次の指示を待っている時、「引き潮が起こっている！津波が来るから今すぐ高台へ避難せよ！」と言われそこにいた消防、警察、自衛隊、関係者の人達が一斉に走り出し逃げている方向の山は火災が起こっているのを見た時、もし津波が来たらどこに逃げればいいのか？この時が一番身の危険を感じた瞬間でした。結局この日の活動はこれで終わり野営キャンプに戻りました。

2日目は前日から燃えていた山火事を消火する命を受け、朝3時にタンク車で出勤しました。正直肉体的に大変辛かったです、行きたくても行けなかった仲間の分や応援してくれている家族の分まで頑張らなければという気持ちで頑張りました。火災は一箇所だけでなく数箇所が発生していてどこから消したらいいかわからないくらい延焼していました。途中津波警報が入って車内で待機したりしていて昼頃まで活動できませんでした。

民家に延焼しそうになっている時ようやく「消火活動開始」の命が下り大阪府下のタンク隊一丸となって消火活動に当たりました。消火も海水を使い初めての体験ばかりでした。その際、釜石消防の人達は我々に大変敬意を払ってくれましたが、この人達の中には仲間、家族が行方不明の人がたくさんいたという事を後で知り本当に頭の下がる思いになりました。

結局活動自体はこの2日間だけで第2陣の交代要員に引継ぎ所属に帰ることになりました。わずか2日でしたが睡眠不足と緊張感で皆体力的に相当辛くなってきている様子でしたが、私はもう少し残って活動したい気持ちの方が大きかったです。一つ残念だったのが、現地へ向かうとき

は大阪府下の消防がまとまって行動していたのに、帰りは各所属ばらばらで帰署したことです。最後は第一陣の解散式なりを行い全員がまとまって帰宅の途に就きたかったです。

後でわかったのですが、現地で活動している我々より、テレビ報道等を見て連絡してくれる職場の仲間のほうが地震発生直後の情報が多かったという事です。特に原発関係の情報はほとんど仲間や家族からのものばかりで、水素爆発が起こったと言うことは我々には伝わってこないのが皆大変不安に思っていました。今後こういった状況で不安を解消するためにも一部でなく全部の人間に現在の災害状況がわかるようにしてほしいです。

寝不足と疲労と寒さで体力的に限界の中、第一陣で出動したメンバーに一人も発熱などの体調不良を訴えた人間が出なかったのは、皆が高い使命感と緊張感を持ってこの任務に臨んだことであるからだと思っています。

最後になりますがこのような崇高な任務に参加させていただき本当に感謝しています。この経験を今後の消防人生の教訓としていきたいです。

消防隊員

私は緊急消防援助隊の第一次隊として、災害発生日の夜に現地へと向かいました。出発直後は派遣場所が決定されず、とにかく隊列を組み東日本へ向かっていました。行き先が決定されたのは派遣途上でした。初めに岩手県大槌町と聞いた時は、移動中だったこともあり情報や映像があまりなく被害の状況が想像できませんでした。



実際現場に到着すると言葉を失いました。地震の被災地の映像などは見たことがありますが、それらとは全く異なるものでした。ただ建物や家屋が倒壊しているのではなく、津波によって形そのものが皆無で、がれきの海のようになっていました。

また、発生直後に火災が発生した地域ではさらに凄惨な状況でした。

これら活動のなかで感じたことは、まず、無力感です。大量ながれきの中を隊で搜索していたのですが、町そのものがなくなり、がれきの海となっているので、どこから手をつければいいのか、どう撤去すればいいのか、人の手だけでどうにかできるのかと不安になり、無力感を味わいました。また、このような凄惨な現場で本当に生存者はいるのか、自分は助けられるのか、とも感じました。

次にこのような他府県、または、連泊で活動を行うことの困難さも感じました。まず自分たちの活動拠点の設置から衣食住まで、活動を行う上では必要となりますが、その普段あたり前のことがこんなにもできないことなのか、難しいことなのかと感じました。なぜなら数百人から成る隊のため、それだけの居住スペースや食糧が必要となり、また移動に費やす時間や燃料等も予測できないからだと思いました。

最後に、今回この派遣を通じてさまざまなことを経験したり、見聞きました。これから先、決して起こらないとはいいい難い東南海、南海地震等の大災害にもしっかりと対応できるよう日ごろから大災害を意識し、この経験を決して忘れないよう過ごしていきたいと思います。

消防隊員

私が東日本大震災の発生を知ったのは、研修のため十数年ぶりに派遣された府立消防学校でした。第211回専科教育特殊災害課程の受講を命ぜられ約二週間の研修最終日、午前中の講義の放射能災害では原子炉の事故でもない限り、大きな放射能災害は起こらないであろうと講義された講師の先生の言葉が、後に本当に起こるとは誰もそのときは思いもしなかったと思います。そして午後から終業式も終わり、共に学んだ他の所属の方たちと握手や肩を叩きながら再会を誓いながら学校を出ようとしている時に、東北地方で震度7クラスの地震が発生した事を知りました。

申告のため訪れた本部のテレビの画面に映ったのは、車や住宅が津波に押し流される信じられない光景でした。申告を終え久しぶりに立ち寄った磐手分署では、緊急援助隊の出場順位第二位であるため着々と出場準備を整えつつありました。正式な出動要請がかかればすぐに連絡をくれるよう依頼し、いったん自宅に戻りました。

自宅でも信じられない事態が映し出されたテレビの映像を家族がそろって見入っていました。この災害に応援で出場するかもしれないことを家族に話し、出場したなら最低でも三日間は帰れないことから、とりあえず入浴を済ませようと思っていた矢先に職場から電話が入り、正式に出場することがわかりました。

個人装備として必要なものはと急いでリュックにつめたものは、着替え・タオル・ヘッドライト・ラジオ・デジタルカメラ等、またマスク・ゴーグルも必ずいる装備のひとつです。

磐手分署では出場車両であるポンプ車に資器材の積み込みを行っていました。ホースの数量を減らしそこに個人装備品とシュラフ5名分を積み込むだけでもいっぱいとなりました。20時40分に消防本部に向け出発。本部では同じく第二陣で支援隊として出場する中5のバスに資器材の積み込みをしている真最中でした。

本部5階で5万円とランシーバーを受けとり、消防長をはじめ多くの皆さんに見送られ集結場所である万博東公園に向け出発しました。ちょうど21時になったところでした。出発前に本部職員の方に食料・飲み物はできるだけ買い足しながら進めとの教えをもらっていたので、まず西分署前のコンビニエンスストアに立ち寄りパン類多数・ペットボトル20本程度を買い込み、緊急走行で万博公園に向かいました。東公園入り口では北ブロックの職員の方に車両誘導され駐車場に進入、すでに10台ほどの消防車両が集結していました。到着報告のため受付場所に向かうと、集結場所の管轄消防である吹田市さんが受付を行って来ていました。よく見ると初任の同期生であったので、緊張の糸を少しばかりほぐし受付を済ませました。その後、次々と大阪府下から消防車両が集まり、およそ50隊が集結完了しました。大阪部隊長である堺市消防局の司令長の無線指示により全隊、万博公園を出発しました。

走行順位等は指定がなかったので、豊中、箕面、島本、高槻の北ブロックからの出場隊は一緒に行動するため携帯電話の番号を交換しあい情報の伝達を図りました。

夜の名神高速道路を赤色灯を点けた多数の消防車両が東に向かってひた走りました。3回目の給油場所である浜松辺りで夜が明けだし、周囲の景色も朝の澄み切った空気のなかでだんだんと目に入ってきました。東名高速道路が津波警報による通行止のため静岡 IC で高速道路を降りなければなりません。高速道路と平行している国道 1 号線もちろん通行止のため迂回路として選ばれたのが、現在建設中の第二東名高速道路でした。

道路公団の車両に誘導され未舗装でところどころ大きな段差のある道路を砂埃を上げながら進みます。前方には青空の下に雪をかぶった富士山が徐々に大きく近づいてきます。富士 IC で再び東名高速に入り東京に向かっていて、指揮隊からの無線により本隊が向かう場所が岩手県である事が伝えられました。東京を超え震災の真っ只中である東北に向かうことに、改めて自分たちが背負っている使命の重さを感じずにはられませんでした。

首都高速を経由し東北自動車道に入り、給油と休憩を入れながらも順調に北へ向け進みました。途中のサービスエリアで手にしたエリアマップの地図で改めて岩手県までの距離の長さを感じましたが、窮屈なポンプ車の中に十数時間も座っているとは思えないほどに疲れはありませんでした。

福島県に入り宮城県を越える頃にはすっかりと日も暮れて、第一陣と合流予定の岩手県前沢サービスエリアに着いたのは 2 3 時を回っていました。そこでサービスエリアの職員の方から振舞われた温かい食事は体を温めてくれるだけでなく、岩手県の人々がよろしく御願いますと言っているように感じました。

給油後、第一陣と合流した本隊は 1 0 0 台を越す隊列となって、ついに千キロ近く走った高速道路を降り、午前 3 時に野営地である遠野運動公園に到着しました。あたりには雪が多く残っており外は真冬の寒さ。ポンプ車の暖房を強にし 5 人が少しばかりの仮眠を取りました。

翌 1 3 日の朝、6 時にミーティングがありその日の活動予定が伝えられました。活動場所はまだ自衛隊さえも入っていない釜石市の北にある大槌町。その後、ニュースでも頻繁に放送される大槌町の地名をその時初めて耳にしました。

まず、先遣隊が情報収集に向かいその後、マイクロバスにて必要な機材を手に持ちいよいよ釜石市に向かいました。釜石市まではおよそ 2 0 km。周りの住宅は瓦屋根が少しくずれている家がある程度で大きな地震が襲ったと言うほどではありませんでした。

釜石の市街地に入っても建物の被害はそれほど目立たず、住民の方も普段とあまり変わらないように見えました。釜石市の大型ショッピングセンター駐車場付近でバスを降り、自衛隊や赤十字社などの救援隊が本部を設営しているあたりでしばらく待機を命ぜられました。

私たちが向かう大槌町は目の前にある山の向こう側と言うことでありましたが、その山を越す道路は狭いらしく一般車両も通行しているため車両はのろのろと走っています。

発災から二日以上たち救出に向かう私たちの前に、一般の車両が何の規制もされずに通行していることがもどかしく感じられました。

ようやくバスも進みだし海岸に近づくにつれ津波の後が目立ち出しました。ここから先は車両で走行できないということでバスを降り、そこからは徒歩により現場に向かいました。前方の山からは数箇所煙が上がり山火が発生していることが伺えました。

歩き出して約 2 0 分真っ暗なトンネルを抜けると大槌町の町が広がりました。まず目に飛び込

んできたのは家と思われるがれきが幾重にも重なって、その中に自動車が混ざっている本当にひどい光景でした。

13時、出発してから40時間が経過しやっと活動に入ることになりました。その日は、家屋の倒壊を免れた地域の安否確認を先着して活動を始めていた救助隊とともにはじめました。一軒目は乾物屋さんと思われ、箱詰めされたきれいな海苔の多くが海水につかっていた。建物はほとんど被害はないのですが、一階はほぼ海水と泥に浸かっており、元の状態にするのは大変であろうと思われました。

その後、6・7軒の住宅の安否確認を行いました。要救助者は発見できませんでした。確認の終わった住宅には玄関付近にチョークで確認済みと書き込みましたが、全国共通のシールが必要であることを強く感じました。3時間近くの確認作業を終え、一旦、指揮本部に戻り休憩をとっているところで、津波警報が発令されてことを警察官から伝えられ全員が高台の場所まで小走りに移動しました。結局、津波が到着することなく日暮れを迎え、マイクロバス等に分乗し野営地に帰りました。

私たちが乗せていただいた釜石市のバスは、釜石消防の職員の方が運転してくれていました。分隊長席に座っておられた副士長のかたによると、まだ自分の家族の安否がわからないこと。釜石消防署の消防車両はほぼ流された。大槌消防は勤務員2名が行方不明である。といった話を聞き、改めて今回の災害の大きさを感しました。

野営地に到着すると、20名以上のエアータントが張られ、夜の食事も用意されており、支援隊の方のありがたみを痛感しました。その夜は暖かいシュラフに包まり足を伸ばしてゆっくり仮眠できました。

活動2日目は各自の車両で現地まで入るとのことで朝8時に出発。途中、燃料補給を済ませ大槌町まであと少しのところ、再び津波警報が出されたため、2時間近く車両待機を余儀なくされました。

警報が解除され、大槌町の指揮本部に到着したのは昼をまわっていました。その日の活動は、住宅の跡形もわからないほど壊滅的被害を受け、その上火災により何もかもが焼けてしまった地域でした。戦争映画で見るような爆撃跡の街と同じ光景が遠くまで続き、自分たちに割り振られた場所を探すのも、建物がほとんどなく、道路もどこにあるかわからないため、なかなか現在地がつかめませんでした。ようやく学校が見えてきたため、それを起点として活動を始めました。

検索を始めてまもなく、一人の遺体を発見しました。遺体というより遺骨といったほうが正しいかもしれません。火災により骨だけの状態で大人である以外は、性別・年齢などまったくわかりません。その場所にマークを施し、次の検索を始めます。起点とした学校は大槌小学校であることがわかりました。その学校の一階部分でも二人の遺体を発見しました。おそらくどこからか流されてきた方であると思われました。ほとんどが焼けた骨だけの遺体でしたが、中にはほとんど損傷を受けていない遺体もあり、40代ほどと思われるジーパンをはいた女性の遺体を見たときは、この方の家族のことなどが思い浮かび悲しみが一段と増しました。

徐々に地図と自分のいる位置がはっきりとしてくるにつれ、災害を受ける前の街の様子が想像できるようになり、しっかりとした大きな街であったことがわかってきました。

しかし、今は焼け野原と言うしかありません。大槌小学校のグラウンドでも2名の方の遺体を発

見しましたが、ここにいたであろう小学生の児童の安否が非常に気になりました。

その後、約3時間で20名のご遺体を発見することが出来ました。その中には、明らかに小学生ほどの身長のご遺体もあり手を合わせる時間が長く辛く思えました。

帰り道は海岸に近い道路が復旧したとのことで、釜石市の中心部を通過して帰りましたが、釜石市街地も非常に激しい被害を受けており、鉄鋼の街、釜石が復興できるのかと行ってしまいました。

野営地に着き、その日の午後到着した第6次派遣隊と申し送りを綿密に行い、帰隊準備を始めました。30時間近くを要して到着した、ここ岩手を2日の活動で引き上げるのは非常に悔しい思いがしましたが、交代要員が到着している限りここに残れるはずもなく食事を摂った後、深夜0時を過ぎてからマイクロバスに分乗し大阪に向け出発しました。

私自身、東北に来たことがなく、いつかは温泉旅行で訪れたいと思っていた東北に、このような形で来ようとは想像すらできませんでした。20時間ほどかけて高槻に到着し、夜遅くにも関わらず集まっていた、本部職員の皆様に拍手で出迎えられ、無事帰隊報告を済ませることができました。その後、警手分署に立ち寄り同僚の顔を見て、深夜1時に家族が待つ家に到着し、私の緊急消防援助隊としての5日間が終了しました。

3人の子供たちの寝顔を見て、普通の生活ができるありがたみを改めて感じ、今まで以上に防災職員として市民の安全安心をしっかりと守らなければと強く感じました。

最後に今回の大震災で犠牲になられた皆様のご冥福と、多くの行方不明者の方の一日も早くの発見を心よりお祈りいたします。

救助隊員

平成七年の阪神淡路大震災では、全国の消防がそれぞれ独自の判断で救助に向かい、活動場所が一部に集中したりし、被災地の情報が行き届かなかったりし、現場では混乱が生じた。この教訓を基に同年六月に緊急消防援助隊が創設された。創設以来、近畿では豊岡の水害や尼崎の列車事故をはじめ全国的には、平成十六年以降で合計十三回の派遣が行われている。また、関連する訓練も数多く実施されている。

今回の東日本大震災で、先の教訓や訓練の成果が発揮できたであろうか、また私自身も阪神淡路大震災で長田区へ応援に出場し消火作業に従事したが、そのときの経験が生かされたかどうか、私の中では、「阪神淡路を越える、想定外の被害」経験を生かすどころか「何もできなかった」が正直な感想である。

私たち第一次派遣隊は、地震発生から約8時間後の20時50分に出発した。現地まで約30時間、約1200キロを走行し実際の活動開始まで約37時間が経過していた。



発生から72時間を経過すると、生存率が急激に低下することは周知の事実であり「はやる気持ちを必死で抑えた」

13日朝、現地を目の当たりにし、はやる気持ちは「何からどうする」に変化した。指揮本部からの指示により大槌町桜木町での検索活動を開始したが、「何からどうする」は、いかに効率よく検索活動を行うかであった。

現地の消防をはじめとする行政機関は壊滅的な被害により機能しておらず情報が全く入らない中で、隊員4名とともに地元の方々からの情報を聞きだし、これを基に検索活動を行った。皆さん自分のことで精一杯の中、我々に付近の状況を説明頂き効率よく活動することができた。しかし、残念ながら生存者の発見には至らなかった。

検索活動中に津波情報があり一時退避命令が出され、高台で待機したが、そのまま日没となり、活動時間わずか3時間半で終了となり野営地に戻った。

14日、現地活動の二日目は、大槌町への出動途上津波警報の発令により約2時間の車両待機の後、現場活動に入った。大槌町上町から末広町の検索が指示されたが、津波被害に加え火災が発生した地区で現場状況から生存者の発見は不可能に感じられた。消防人として「諦め」は許されないと心に言い聞かせ活動に専念したが、やはりここでも生存者は発見できなかった。16時に第二陣と引継ぎを行い活動を終了した。二日目も活動時間は3時間であった。

隊員たちは、「まだできる」「帰りたくない」と口々に言っていたが私も同じで、「もっと、何かできたはず」と自問自答をを繰り返していた。阪神淡路での経験を基に、また緊急援助隊の訓練等を基に隊長として、達成感を感じられる現場活動ができなかった事が、非常に残念である。災害の規模があまりにも広域であったため、消防力を集中した活動を展開できなかった。圧倒的にマンパワーの不足であったことも私たち「消防」の力不足と言わざるを得ない。

現場での活動時間は、二日間で合計わずか6時間半、しかし、この派遣で得た教訓は今後に必ず生きてくるものだと信じている。

特に若い隊員たちにとっては、派遣命令から、現地活動、津波警報による待機、野営、他の消防隊と連携した活動、現地での調整、又、被災地の方々の期待、感謝など訓練では決して身につかないことを経験し学んだと感じている。彼らが将来、隊長としてこのような現場に出場することがあれば、必ず上手く活動してくれるものと確信している。

また、私自身も貴重な経験ができたと考えている。長時間の移動、寒冷地での現場活動、余震や津波発生に対する恐怖などの過酷な環境での派遣において、4名の隊員を家族や恋人の元へ、怪我なく無事に帰還させることができたことは、隊長として今回の派遣において、唯一、達成できたことであると考えます。

今回の派遣で、国、都道府県レベルにおいても、また、高槻消防としてもそれぞれ課題が見つかったと考える。派遣隊の隊数、車両選択、派遣期間、現場指揮・支援体制など「想定外の災害」であったとしても、不備があったことは今後の教訓となるはずである。

次の機会を望む訳ではないが、「もっと、何かできたはず」と思わないよう、体制を整え、準備を怠らないよう心がけるべきだと考える。

終わりに、今回の震災で亡くなられた方々のご冥福と、被災された方々の一日も早い復旧と復興を祈念いたします。

救助隊員

私たち中救助隊は被災後、6時間経ってから第一次派遣隊としての出場であった。振り返ると遅いように感じたが、被害の大きさや要請すべき行政機関が壊滅状態にあり、被害状況の把握ができなかったことを考えると仕方なかったのかもしれない。

30時間を越える移動後、現場到着は日付が2日回った13日の深夜であった。当然あたりは暗く、まともな情報収集が出来なかったこともあり、翌朝から活動開始となった。

3月11日14時46分の発災から活動開始時刻まで約40時間が経過していた。

現地到着（野营地）から活動開始までの数時間、極寒の中、救助工作車の中で過ごした。

今まさに、救助を待つ人がいると思うと、夏場でも低体温症になると言われる瓦礫の下、この寒さが最大の敵になる。一刻も早く活動したいという一心だった。大きな組織で活動する以上、指揮隊の決定には協力的に従わなくてはいけない。しかし、その決定を素直に受け入れられるほど落ち着いた心情ではなかった。

活動が開始された13日6時30分。天候は良く、救助隊として有効な救助活動が出来ると確信していた。しかし、活動場所までの道路は手前約3kmで寸断され、車両の接近が出来ずに、持てる資機材だけを携行した。現場に近づくにつれ、被害の甚大さを目の当たりにし唖然とした。被害の範囲は把握できないほど広く、その被害程度は今手持ちの資機材だけでは到底対応できない。愕然としながらも、隊の中で何が出来るかを考えた。

活動1日目、中救助隊が担当した活動地区は、津波により家屋の内外に被害が及んでいた。家ごとひっくり返したかのような荒れ模様。それでも、あきらめずに生存者を検索した。「誰か居るか！救助隊や！」

呼びかけも搜索活動もむなしく、男性1名、女性2名の遺体を発見するに終わった。

初日の活動を終え、野营地に戻ってからも隊員の口数は少なく、一様にショックを受けているようだった。明日の活動に向けて気持ちの整理をしながら、車の中で眠りについた。

翌朝、小隊長ミーティングで昨日に引続き搜索活動を行うという命令が下った。前日中に活動現場までの道路の仮復旧がされており、車両が直近まで進入出来ることもあり、私自身少し期待を持っていた。

府下の救助隊が車列を組み、現場に向かう様は、我ながら勇ましく逞しく感じていた。しかし、そんな私たちを嘲笑うかのように、津波発生の情報を受け、現場のはるか手前で足止めをされた。

「津波の威力を舐めてはいない。それでも、逃げる人に逆行するのが消防じゃないのか？今が消防魂を発揮する時じゃないのか？」動けないジレンマに、消防の一員であることを恨みさえした。

現場到着し活動開始した頃には13時を過ぎていた。発災から72時間まで、残り2時間を切っている。それでもまだ望みがあると信じていた。

現場での詳細な指示を受け、担当の地区へ向かいながら、かすかな望みが自分の中で消えていくのを感じた。

その街は地震の後、津波に遭い、火災に見舞われた。見渡す限りの焼け野原に絶望した。消防士になり、初めて現場をあきらめた。

崩れ落ちそうな自分と必死に折り合いをつけ、遺体の搜索をした。生存者を信じて活動できる

状況ではなかった。現場状況から見ても、そして自分自身も。

20名の遺体を発見し、2日目の活動を終えた。

もっと早く行けたら・・・。

救助隊員として、救助活動をもっとしたい。救えた命があったかもしれない。派遣を終えて、結局何も出来なかったように感じている。

緊急消防援助隊としての課題はたくさん出来ただろう。組織としても個人としても、緊急事態の援助隊として、消防が持っている力をもっと有効に活用出来たと思う。

福島の原子力発電所では未だ終息の目処は立たず、各地では少しずつではあるが復興が始まっている。警察、消防、自衛隊、海保、医療関係者。そして被災者の方々など。それぞれがそれぞれの戦いを今もしている。

私たち高槻消防は、今回の災害に派遣されることは今後ないだろう。現地に行けなかった者の辛さや、活動したものの悔しさ。消防職員として、一人ひとりがそれぞれの思いを忘れてはならない。

そして、このような大災害がないとは言えない今後、今回派遣された高槻消防救助隊員として、より一層の体制強化を考え、犠牲となった方々を決して無駄にすることはできないと感じています。

縁起でもないことかも知れませんが、消防職員である以上湧き上がります。

次こそは・・・。

救助隊員

平成23年3月11日、午後2時46分東北地方太平洋沖地震が発生した。私は、高槻中救助隊として当務中だった。発生後、事務所ではざわつき始め、テレビをつけると、津波が船、車、家までを飲み込み流される映像が中継されていた。

夕方、第一次派遣隊として正式に要請があり、緊急消防援助隊大阪府隊として参加することになった。災害発生から5時間余り。初動の遅さを感じながらも「絶対に助けたい！」と、意気込んでの出発となった。

大阪府隊67隊266名が大連隊を組み、威風堂々被災地に向かった。この消防力があればどんな災害も怖いものはないと思ったくらいだ。途中、東京方面から東北方面へ向かうよう指示があり、最終的に「活動場所岩手県」府隊長から命が下った。大阪を出て30時間、走行距離1000キロ。長距離走行用には作られていない消防車での道のりは、私も疲労を隠さずにはいられなかった。野営地についた頃、日付は13日の深夜2時を回っていた。明日の現場で力いっぱい活動できるよう、車内で少しの仮眠をとった。

早朝のミーティングで「活動場所大槌町！」。災害発生から40時間が経とうとしていた。まだまだいけると自分の中で言い聞かせて、大槌町へ向かった。

現場は消防車両では近づくことができず、途中、現地の方が用意したバスに人員と資機材を載せて向かった。消防車両以外で災害現場に向かうのは初めてだった。バスでの移動も限界に、現場から約3キロ手前で止まった。瓦礫で道路が寸断され、通ることができない。

ここから約3キロどんな現場が待っているのか……。資機材を担いで現場まで歩いた。

途中、何人もの被災者とすれ違った。手を合わせて「こんなところまでありがとうございます。どうか、よろしくお願いします。」と訴えられた。胸が熱くなる気持ちを抑えて前進した。「必ず助けます！」と強く決意した。

現場に着いた。そこにあるはずの町がなかった。海岸線まで何キロかあるはずなのに、一切の建物がなく一面が瓦礫の山になっていた。この中に生存者はいるのか……。

指揮本部から指示が下り、建物が残った地域から検索が始まった。1階部分は津波が押し寄せ、瓦礫で一杯だった。家の中に入り、声を出し要救助者を探した。しかし、誰もいなかった。その検索した隣の家では無事だった住民が家の片づけをしていた。助かった人、助からなかった人、ここで何があったのか。日没まで検索は続けられたが、この日生存者は発見できず、検索終了。

2日目の朝、まだリミットといわれている72時間まで数時間ある。あきらめると言い聞かせ、野営地を出た。しかし、その思いもむなしく、津波警報にて現場に近づくことができず立ち往生。「早く！」イライラが募った。ようやく現場に着いたとき、昼過ぎだった。なかなか思った活動ができない。

2日目は一面瓦礫の地域に入った。そこは、津波で流されただけでなく、残った瓦礫の山が火災で焼き尽くされていた。経験したことはないが皆が口をそろえていった。戦時中、空襲にあえばこうなるのだろう。人の焼ける臭いがそこら中でしていた。

その日、20数体の遺体を発見した。瓦礫の山を表面上でしか検索出来なかった。瓦礫の中にはたくさんの遺体があったらう……。足りない、全然足りない。人員も資機材も。どこに要救助者がいるのか？どこを検索したらいいのか？どこから手をつけたらいいのか？津波の災害を目の前に無力感を覚えた。72時間も経ち、結果生存者発見できなかった。検索も終わった頃、第3次派遣隊と交代することになり、第1次派遣隊は帰隊することになった。

今回、この大震災で初めて緊援隊として活動することが出来、自身とても貴重な体験が出来た。緊援隊の組織のあり方、初動や機動性、また、個人的にもいろんな面で課題の残る結果だったと思う。これを機に変わっていくと思う。そして、今現在も福島原発、行方不明者の捜索、被災地の復興に向け、命を懸けた人が多くいる。私は普段の生活に戻ったが、そうでない人が多くいる。悔しいが今回の災害では現場で活動することはないだろう。しかし、消防人としてまた、いつか来る災害のために終わりなき訓練をし、この体験を生かし、次こそ一人でも多くの命を助けたい。

救助隊員

私は、緊急消防援助隊大阪府隊第一次派遣隊として、平成23年3月11日の19時30分中消防署を出発した。発災から六時間以上経過してからの出場要請だった。要請がくるまで、テレビで被災地の様子を見ていたが、悲惨な映像が次々と映しだされ、深刻な常態である事が見て取れるのに、なぜ要請がこないのかと疑問に思っていた。そして19時過ぎにやっと要請がきた。なぜもっと早く要請しなかったのだろうかと思いつつ準備にとりかかった。

被災地に向け出発した私達は、高速道路のサービスエリアなどで現地の悲惨な現状を目の当たりにした。一刻も早く活動開始し、一人でも多くの人を助けたいと思ったが、現地までの距離が

障害となり、刻一刻と時間は過ぎていった。私達が最後のサービスエリアに到着したのが3月12日の21時だった。出発してから24時間以上が経過していた。さらにそこから野営地まで移動し、合計30時間以上移動に費やすこととなってしまった。

野営地に到着した私達は翌朝からの救助活動にむけ仮眠についた。

翌朝6時前に目が覚め、寒さに襲われた。この寒さの中、助けを待っている人がいることを考えたら、いてもたってもいられなくなった。私達が救助活動に行く岩手県上閉伊郡大槌町は、自衛隊も消防もまだ救助活動に入っていない場所だった。目に入ってくる映像は衝撃的なものばかりで、現実のものとは思えなかった。道路が瓦礫等により、寸断されていたので徒歩で移動して



いたのだが、道中被災者の方に「ありがとうございます」「お願いします」等たくさんの言葉をかけてもらいました。中には手を合わせ念仏を唱えるようにして声をかける人の姿も見えました。とても印象的な光景だったので、胸の奥が締め付けられる思いと共に私達への期待の高さを感じた。

現場に着いた私達は、津波で被害を受けた地域で活動することとなりました。

検索に入った家の中はどれもひどい

状態で、もし家の中にいて津波にあったらと考えたらぞっとしました。活動中も余震が続き、何度か待避することもありました。その日、生存者を発見することはできませんでした。

翌朝、野営地を出発し災害現場に向かったのですが、津波注意報が発令し車両待機を命ぜられました。一刻も早く活動を開始したかったのだが、なかなか注意報は解除されず私達はただただ待つことしかできませんでした。そんな中、地元の消防団の方々は現場に向かうべく私たちの横を通り過ぎて行きました。私は、それが悔しくてたまりませんでした。

岩手まで来て、私は何をしているのだろうか、役に立てていないのではないかと憤りを感じました。その後、注意報は解除され現場に到着し活動開始できたのが13時を過ぎた頃でした。

活動開始した私たちの目の前に広がっていたのは、津波で被害を受けた後、火災によってあたり一面が焼け野原となっていました。私達が皆口をそろえて言ったのは「戦後みたい」という言葉でした。周囲からは人が焼けたときの臭いが漂い、瓦礫の中でまだ火が燻っている状態だったので、私は生存者を発見することなどできないのではないかと感じてしまいました。検索をしても、範囲が広いわりに活動人員も少なく時間も余り無かったため、指定された範囲の半分も検索できませんでした。そして、私達の現地での活動が終わりました。

今回の活動を通して、現地での人手が全然足りていないことを痛感させられました。私達緊急消防援助隊でも、車両はたくさんあるのに隊員が少ない。言い換えれば、車両はそんなにいらないのでもっと人員が欲しいということです。

私が今回現地で見えたもの、経験したことはこれから先の消防人生できっと貴重な財産となると思います。現地で活動したかったのに行くことができず、悔しい思いをした隊員はたくさんいる

はずです。これから先、今回のような大規模災害が何時発生するかもわかりません。今回の経験を生かせるよう、励んで行きたいと思います。

救急隊員

私は、緊急消防援助隊大阪府隊の高槻富田救急隊として、3月11日19時30分、万博公園駐車場に集結し、20時40分頃当初の集結場所であった東京へ隊列を組み出場し、途中で岩手県へ向かう指示が入り被災地に向かった。

途中、高速道路が通行できず、工事中の第二東名を走行し現地に向かったこともあり約30時間後の13日深夜に、野営地である岩手県遠野市の遠野運動公園に到着しました。

長い道のりに疲れていたが、朝から釜石市で救護活動を行うため、救急車内で仮眠を取り、消防局消防隊員4名を乗せ、被災地の大槌町に向かいました。

大槌町に到着し、私の目に入ってきた光景は、津波で壊滅的な被害を受け、がれきの街となり想像を絶する世界となっていました。

今、私が居るこの街で多くの方が亡くなり、多くの行方不明者が出ており、やるせなさを感じながら隊員を降ろし、待機場になっている釜石市内の指揮本部へと向かいました。

一日目（13日）は、待機中に一件の救護活動を行い、夜に野営地に帰着した。

今日1日特別疲れるような事はしていないにもかかわらず、とても疲れていました。

翌朝も朝から釜石市へ向かい、ヘリコプターへの患者搬送や、転院搬送の救護活動をしました。が、まるでテレビのドラマを見ているような光景に驚かされ、中でも釜石市内の商店街が津波により破壊され、一般の乗用車のみでなく消防車が何台か、街の中で横転し壊れていた様子を見たときは、驚きでしばらく興奮していた気がします。

今回の地震により、いろいろな思いで避難生活をし、亡くなられた方や行方不明者の方を無駄にしないためにも、何時起こるか分からない災害に対し訓練を行い、今回の体験を次にいかせていきたいと思っています。

救急隊員

今日も1日平穏無事な日になると思い出勤し、仕事に勤しんでいたが午後3時ごろ、東北地方で大地震が発生したとニュースを放送しているのを見ていると、遠く離れた場所で大変な災害が発生していると思ったが、阪神大震災に比べれば人口や建物状況を鑑みれば被害は少ないであろうと考えていました。ましてや大阪から岩手県へ災害派遣に出勤するとは考えていませんでした。

その日は、救急隊員だったので最初に中署に集合し救急車にステッカーを貼り、水等の物資を救急車に載せた後、万博広場に行きました。各市町村から集合した救急車や消防車両は隊列を組みながら約30時間かけて岩手県へ向かいました。

私は、阪神大震災のときは出勤することは無かったので、災害現場で活動することがどういうことなのかあまり理解することなく、ただひたすら災害現場に近づくにつれ不安に苛まれました。地震が発生すればライフラインとなる電気、水道、ガスが使えなくなると判ってはいるが、災害

現場近くのパーキングへ休憩のため寄ってみると、電気が使えないため蠟燭の火で明かりを灯しており、水道の蛇口を回しても水が出ない状態でした。

野営地に到着しミーティングを終え約1時間仮眠した後活動に取りかかりました。

初日は睡眠不足でまともな活動が出来るのか不安でした。多忙で昼食も摂れない状態でしたが、何とか気力で乗り越えることが出来ました。

その後、野営地に帰り簡単な食事をとった後救急車内で仮眠し、翌日には活動しました。2日間現地で活動しましたが今まで見たことのない風景に唖然とし、未曾有の災害に際して自然の脅威を肌で感じる事が出来ました。

町には人々の喪失感が漂っていると思いましたが、逆に瓦礫の撤去に励んでいる消防団員や、病院内で懸命に患者の看護にあたっている看護師や医師、遺体の捜索やヘリコプターで活動を行っていた自衛隊、被災された住民も懸命に活動している姿が救急活動中に目の当たりにして、私も寝不足や疲労感があっても反対に元気をもらい活動することが出来ました。

医療機関では、自衛隊と連携し遠方の医師をヘリコプターで搬送したり、自衛隊は独自で活動しており消防と比較した場合、専門的な資器材を使用し円滑な活動を実施していました。しかし、消防機関はこういう活動になれていないように感じ、指揮もミーティングで話し合い活動状況の打合せをしても、災害現場に着くと二転三転し各自の隊ごとに判断し、即断する実効性が有効であると感じました。初めていく場所なので地理等も不慣れで、たとえ行く経路が判ったとしても瓦礫等で道路が寸断された状態なので迷ってしまい、活動がうまく出来なかったことで自分に対しての歯がゆさも感じることもつながりました。

また、人員や車両を現地に運び行動するだけでなく、隊員の生活のフォローのため後方支援隊の重要性も認識しました。いろいろな問題点や反省するべき点も考慮すれば、現実の災害に対しては経験と無理（援助活動場所が遠方）をしない事や、がんばり（気力や根性論）過ぎないことも精神的には重要なことだと感じました。

任務を終え帰宅すると、連日放送される被災地の現状と被災状況を見ながら、見覚えのある場面を見ると改めて大変な環境の中で生活をしていたのだと思いました。日がたつにつれ被災者の方やボランティアに疲れがあらわれている画面を見ると、阪神大震災のようにみんなの力と国の支えで、早く元気になってほしいと親近感というよりいっそうの興味を持ちました。

この仕事に携わることによって得た経験を、これからの業務にどのように反映されるのかは、現地での教訓を携えていくことにより、冷静に判断し活動することを初心に帰り再度考えさせられることが出来ました。

いまだ復興するのに月日がかかり、亡くなった方や残された遺族のことを思うと気が滅入ることもあります。被災地の一日も早い復興を願っています。

救急隊員

3月11日19時40分大阪府隊第一次派遣隊として万博公園駐車場へ向け消防本部を出発しました。当初派遣先は東京方面とのことで出発しましたが、万博公園出発後約9時間経過した静岡県内で派遣先が岩手県と決定しました。消防車両が約六十台隊列を組んでの移動は休憩や給

油にも時間を必要としました。被災地に近づくにつれ、サービスエリアも停電しており、トイレをするのもヘッドライトが頼りでした。派遣先直前の前沢サービスエリアまでは携帯電話も使用可能でありましたが、その後は不通状態であり、しばらく職場や家族との連絡がとれず不要な心配をかけてしまいました。

現地における救急隊の活動としては、活動初日に消防隊員四名の被災地大槌町への人員搬送となりました。災害現場を目の当たりにして自然災害であると分かってはいても、口からは「こんなにまでしなくても」という言葉が漏れました。

その後は、病院間の転院搬送やヘリポート・病院間の搬送でした。二日間で四名の患者を搬送しましたが、いずれの患者も中等症であり特に問題なく搬送できましたが、当然のことながら医師や看護師の同乗もなく、片道約四十分の距離であり、途中から無線も携帯電話も不通といった状況でありました。

もしここで患者の症状悪化があれば、どこの誰に指示を仰げばよいのか、そもそも通信手段がない状況で出来ることは限られていると思うと、安易に転院搬送と引き受けたが、とてもリスクの高い搬送であったと思います。

現地での二日間は、日中は活動しやすい気温とはいえ、日没後の東北は寒さ厳しく、僅か数日の不便でも疲労が強く、被災地の方々は今でも避難生活が続いていると思うと、一日でも早く普段の生活に戻れることを願っております。

後方支援隊員

はじめに、この度の東日本大震災で被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々へ謹んでお悔やみ申し上げます。

去る、3月11日に発生した東日本大震災をうけ、震災当日の夜、緊急消防援助隊大阪府隊後方支援隊として高槻市消防本部を出発しました。

私の任務は、北ブロック全隊の後方支援活動です。北ブロックでは豊中市・吹田市も後方支援隊登録をしていますので、この3市で北ブロック全体をサポートすることになります。もちろん、もっと大きくとらえれば、大阪府隊全体をサポートすることになります。

更に、北ブロック幹事市として、北ブロックの統括もその役目となります。

正直、今まで経験したことがなく、その役目が果たせるのか大きな不安はありました。災害活動ではなく、災害活動をする隊員をサポートしますので、大きな任務としては野営場所の設置・運営になろうかとは思いますが、派遣先もわからないままとりあえず関東方面へ向けて出発したため、野営場所の環境や天候、そして運営方法、情報収集、本部との連絡体制、隊員の健康管理、物資の調達方法等、様々な懸案が頭に浮かびますが、救いは、昨年6月に愛知県で行われた第4回緊急消防援助隊全国訓練に、後方支援隊として参加したことです。訓練とはいえ、「そこで経験したことは何かの役に立つはず」と自分に言い聞かせ出発したのを今でも覚えています。16年前の阪神・淡路大震災も、震災当日の夜に消防本部を出発しましたが、もう二度とこのような大きな災害を経験することはないだろうと思っていましたので、再びこのような災害に直面することに、気の引き締まる思いがしました。

出動後、後方支援隊は大阪市消防学校に集結、各市町の支援資機材等を整理積載し、隊長ミーティングのあと、12隊34名で先に被災地に向かっている仲間を追いかけるかたちで出発しました。

まず考えたことは、あたりまえですが安全に被災地へ到着することです。とはいえ、長い道中になることは間違いなく、また、派遣先がわからないため、関東以北への派遣も考えられるので、私を含め2名だけの後方支援隊としては、これから先の長い道中や、特に夜間走行を考えると、緊急走行中ではありますが、阪神・淡路大震災の経験や仕事以外の話をできるだけ話し、リラックスした環境を作るように努めました。

近畿道、名神高速道と走行していると、被災地から距離があるせいか、通常通りの交通量があり、12隊の車列を組むのも大変ですし、休憩を兼ねた燃料補給のためサービスエリアに立ち寄るわけですが、駐車スペースの確保や燃料補給に時間がかかりました。次の燃料補給先の目途が立たない中では、全隊が念のため燃料補給をすることは仕方のないことですが、今後は、部隊を分け、休憩箇所も別々にし、所要なポイント（SA）だけ全体が集結する等、小回りのきく部隊運用を検討してもいいのではないかと思います。

明け方になり、府隊長より、「東名高速静岡IC～富士IC間が津波警報のため通行止め、これより静岡ICを降り、一般道を走行する。」との無線を傍受し、これまでの道のりとは違い、だんだんと地震による通行障害が影響したのではないかと感じ、長い先の道中を今一度覚悟しました。

静岡ICからは、地元消防の先導により一般道を走行しましたが、約2km以上はあろうかと思われる消防部隊の車列に、一般車両にあっては、ただ車列が通り過ぎるのを静観し、高齢者と思われる方は、何度も我々の車列に向かい、手を合わせお辞儀されていました。被災地に向け走行する我々に対し、早朝にもかかわらず、市民の暖かいご支援とご協力をいただき、胸にこみ上げる熱い気持ちと、それ以上に、我々に対し、「被災地でがんばってくれ」という強い思いを感じた場面でした。

また、一般道から建設中の高速道路を通行させていただきましたが、これには各関係団体のご尽力とご協力、そして素早い対応に頭が下がる思いでした。

また、建設中の高速道路を走行中、府隊長より「大阪府隊はこれより、東北方面へ向け走行する。」との無線を傍受し、寒さ対策をどうするか不安がよぎりました。

高槻消防車両に関していえば、後方支援隊車両以外は冬用タイヤを装着していたので、目的地までの走行には問題ないだろうと思いましたが、野営地での対応をどうするか、所有する寝袋は寒冷地仕様にしてあるので、隊員が寝るには大丈夫だろうと思いましたが、野営地を運営する上で、雪の影響がどうであるのかという不安が頭をよぎりました。

東名高速から首都高を抜け、東北道に入るところで、警察による通行規制（緊急・救援車以外通行禁止）がされており、このおかげで、東北道の走行や休憩については何の問題もなく、燃料補給についても、緊急車ということで満タン給油していただき、本当に助かりました。しかしながら、被災地に近づくとつれ、地震の影響で道路は陥没やひび割れが所々にあり、走行に支障を

きたしましたが、ここでも、道路公団による懸命の復旧作業により、徐行ではあるが走行できる状態でしたので、復旧の早さに驚くとともに、その素早い対応に敬服しました。近畿で同じことが起これば、このような対応ができるのかと疑問も感じました。また、東北道前沢サービスエリアでは、余震がたびたび発生する中、停電にもかかわらずろうそくを立てたレストランで、暖かいうどんとおにぎりを提供していただきました。

このように、被災地に向かう道中に、それぞれの地元の方々のご支援をうけたことは、「頑張っ
てこい」、「一人でも多く助けてくれ」という皆の強い願いであるとともに、我々に勇気を与えてくれました。

野営地の岩手県遠野市運動公園に到着したのは30日午前3時頃、出発から約30時間の道のりでした。さすがに、かなりの疲労度はありましたが、地面にはところどころ氷がはっていたので、これからの活動が更に困難になると容易に想像でき、疲労感よりも緊張感のほうが更に大きくなりました。

車中で少しの仮眠後、すぐに野営地の設営に入りましたが、テントひとつにしても、他市のテントの場合、その設営方法を理解するのに時間がかかりますし、山間部のため風が強く、ひとつのテントにいくつもの控え綱をとるため、圧倒的な作業量に対し、絶対的に人手が足りていないということは作業開始後すぐに感じました。

本来現地にてミーティングをし、後方支援隊として情報共有や運営方法等の意思疎通を図るべきですが、短いミーティングのみで、後は皆が作業に追われている感じでした。また、設営中に何度か本部との連絡をこころみたものの、携帯電話は使えず、また、頼みの綱の衛星電話も使えず、連絡手段が一切ない状態でしたので、あえて言わせてもらえば、活動初期における後方支援隊員は1人でも多くの隊員を投入すべきであるとともに、このように本部と連絡がとれない場合、統括管理する立場の後方支援隊にある程度の決定権をもつ上級幹部がいることが望ましいと思いました。

活動するなかで、悔やまれることが2つあります。1つは、隊員全員がテントで仮眠することができなかったことです。テントの数が足りず、いろいろ他市と調整はしてみたものの、車中泊となる隊員もでてくる結果となりました。出発から考えると、3日連続車中泊、そして昼間は災害活動となる隊員にとっては、かなりの疲労度があったと思います。これについては、本当に申し訳ない気持ちでした。

せめてもの救いは、テントで仮眠した隊員から、寝袋があたたかくて良かったといってもらえたことです。

翌日、近隣の高校体育館をお借りすることができたので、そちらへの移動となりましたが、これについても、圧倒的な作業量に対し、絶対的に人手が足りていないので、日没までに撤収及び体育館の準備が終わるのか心配しましたが、交代要員が昼過ぎに到着してくれたおかげで、何とか災害現場から帰隊する隊員を体育館で迎える準備ができました。最終的に野営地の撤収が完了した時は夕暮れ時で、車のライトを照らしながらの作業でした。

もう1つ悔やまれること、それは、第1陣で出発した隊員を、体育館で休ませることができな

かったことです。大阪市や北ブロック各後方支援隊の方とも調整し、翌朝帰阪する段取りをしていましたが、突然第1陣の帰阪話が持ち上がり、調整していた私にはまさに寝耳に水で、どこからそんな話がでたのかもわからないまま、北ブロック各市と消防本部との調整の末、深夜の帰阪となりました。

心配したのは、大阪を出発してから、十分な休息をとっておらず、また、先に述べたように、車中泊が続いていた隊員にとっては、また一昼夜かけて帰阪するわけですから、誰が考えても事故につながる恐れは十分にありました。また、北ブロック各隊員を乗せた人員搬送バスの運行を、救助隊員に任せなければならず、災害活動を終えたばかりの隊員にその役目を課すことは、本当に申し訳ない気持ちと、万が一事故を起こした場合に、この判断をしたことが一生悔やむことになるのではないかと悩みましたが、結果的に、この帰阪の流れを変えることはできなかったことは、私の力不足です。結果的に、全員無事に帰隊することができたのは、皆のおかげだと思っておりますが、事故を未然に防ぐためにも、あの判断は間違っていたと思います。

今後は、他市職員を本市所有車両で人員搬送する場合に、車両運用委託等の方法を検討するか、職員で運用するならば、北ブロックとして意見がまとまらない場合に、結果的に、幹事市とはいえ本市の決定だけでは決められないことがありますので、こちらの決定権で車両運用することを認識してもらい、できればそういった取り決めを交わすことも大事ではないかと思えます。

以上、後方支援隊として出場した私の感想を述べさせていただきましたが、後方支援隊として大事なことは、全体のサポート、すなわち野営地の運営や情報収集とその情報を発信することであり、これらの管理がいかにかたど勝手ながら思いましたので、今後、後方支援隊として出動する時は、このことを頭の片隅に残し、活動していただきたいと思えます。



後方支援隊員

今回、東日本大震災に緊急消防援助隊大阪府隊として派遣され、消防職員として貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

私は、第一次派遣隊の後方支援部隊として岩手県へ派遣されました。隊長と2名で運転を交代しながら約30時間に及ぶ車両での移動の末、ベースキャンプ地となる岩手県遠野市に到着したのは13日の未明でした。この移動中に感じたことは、多数の車両が隊列を組んで走行することの難しさでした。車両の性能、燃費、機関員の疲労度等、車両毎に相違がある中で、最適な場所での燃料補給や休憩を取りながら安全に目的地へ到着することがいかに難しいかを実感しました。そしてそのような中、事故なく移動ができたことは、大阪市消防局を始めとして多くの方々のご努力のおかげであったと感じています。

13日の現地到着後、すぐに活動に入るものと思っていましたが、長距離の移動による疲労及び夜間の活動による危険性を考慮して、まずは休息をとってから活動を開始することでした。「72時間」以内であるにも関わらず、活動を開始できないことに焦りともどかしさを感じました。緊急消防援助隊として出動している以上、活動隊員も夜通しでの活動も覚悟の上であったと思います。複数の所属が合同で活動する緊急消防援助隊では難しい部分ではあると思いますが、1パーセントでも生存救出の可能性が上がるのであれば多少の無理も必要なのではないかと思いました。

現地到着後、車内での仮眠を取った後、活動隊は活動拠点である大槌町へ向け順に出発して行きました。この時、後方支援部隊として残らなければならない私は、活動隊員として現場に赴き救出活動に従事したいという思いに駆られました。自分の置かれている立場、自分の役割を見つめ直し、自分の代わりに過酷な状況の中、必死に活動をしてきている活動隊が少しでも現場を忘れ、次の日の活動に向けての英気を養うことができるような環境作りをしようと気持ちを切り替え、後方支援部隊としての活動に専念しました。

まずは、活動隊が少しでもくつろぐことが出来る仮眠スペースの確保、そして、少しでも良い状態で食事が提供できるような準備を他のブロックやブロック内で調整をしながら進めていきました。しかし、ブロック内の出動人員と比較してテントやベッドの数が不足していることが判明し、ブロック内で調整を図りましたがどうしても車内で仮眠をとってもらわなければならない方が出てしまい、疲れて帰ってくる活動隊の皆さんには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

活動隊が活動を終え、ベースキャンプ地に帰隊した時、泥々の現場外套に身を包み、疲労困ぱいの表情で帰ってきたことを鮮明に記憶しています。その表情からは、生存救出できない精神的なストレスと丸一日の活動から来る肉体的な疲労がにじみ出ていたように思います。

今回の活動のように、それぞれが与えられた任務を全うしようと、活動隊は救出活動のプロとして、また、後方支援隊はサポートのプロとしての意識を持ちながら互いの意識と行動が歯車のようにうまくかみ合うことで、結果として隊がうまく機能するのだということを実感しました。

私個人としては、緊急消防援助隊として出動するのは初めての経験ではありましたが、緊急消防援助隊の所管課に所属していたこともあり、普段からある程度のシミュレーションは出来ていたため特に大きな混乱やトラブルもなく出動できたのではないかと感じています。しかし、大きなトラブルは無かったものの、決してスムーズであったとも言えず、普段ではなかなか気付かないような、より細かい部分まで準備が必要であると強く感じました。

今回の活動全体を通じて感じたことは、確固たる初動体制の確保と必要な情報を必要な時に必

要な隊に伝達できるような情報伝達経路を確立すること、そして、普段から滅多にないことだからこそ訓練を繰り返し行うことが重要であるということです。

また、事務局と同等の知識及び認識をいかにして全職員が持つことができるかが今後の課題であり、今回派遣された私達の使命であると感じています。



消防隊員

私は、緊急消防援助隊が発足前の1995年1月に発生した阪神淡路大震災、2004年10月に発生した台風23号がもたらした豪雨により兵庫県豊岡市の円山川が氾濫する災害に緊急消防援助隊として出動した事案に次いで今回の2011年3月11日に発災の東北地方太平洋地震にともなう津波被害による災害で他県への応援は三回目となりました。

私達は、第二次隊（全体では第六次隊）として、高槻市が代表幹事市とする北ブロック隊は、滋賀県草津PAで大阪府下の他ブロック隊と合流して、大阪府隊として大阪市消防局指揮の下で応援出動先である岩手県上閉伊郡大槌町への出動となりました。大槌町は、釜石市に隣接する北に位置し東は太平洋リアス式海岸に面し、西は北上山地で面積約200平方Km、人口約15000人の町である。

私の出動した過去の災害と大きく相違するのは、今回の災害は死者及び行方不明者の総数が2万数千人と言われている様に、東北地方太平洋岸全域の広範囲にわたる大規模な災害であるという事です。

私が、実際に現地に入った捜索活動初日の感想は、高い防波堤や防潮堤をもろともせず、いとも簡単に乗り越えたと思われる津波の恐ろしさと、跡形もなく瓦礫の山と化した壊滅的な町並みの光景を目の前にして、一瞬の出来事で人々の生命と生活すべてを奪い去ってしまう津波災害の恐ろしさを目の当たりにして愕然とし、言葉がありませんでした。

過去の教訓からも東北地方の沿岸部では津波に対して我々の想像以上に日常から人々の危機管理意識は高いものであると考えられてきましたが、その想定されている規模をはるかに大きく上回った津波被害であった事がわかりました。

阪神大震災と比較して今回の災害で真っ先に感じたのは、道路と瓦礫との区別が全くつかない状況であるという点と、活動中における余震の度に大きな津波が襲ってくるのではないかとこの恐怖心がある中での捜索活動であったことなど、想像を絶する状況でありました。

8日間にわたる活動状況では、気温がマイナスの日が数日あり、積雪も約15cmで、野営拠点である岩手県遠野市の県立高校体育館から現地まで約60kmの移動においても大変困難でありました。また、体育館では約300人の隊員が野営をしており、各消防本部の支援隊の方々や現地住民からの差し入れ食料等、支援隊のもつ重要性も再認識させられました。

現地においての活動内容は、大阪市、堺市の指揮隊のもと、大阪府隊を3つの中隊に分け各中隊に小隊として救助隊、消防隊、救急隊の各隊による災害地の検索区域をローラー作戦により生存者の発見及び救出を主眼におき活動を行いました。

残念ながら私たちの中隊では生存者の発見には至らず遺体の発見ばかりでしたが、他の中隊では発災から4日後に発見救出という感動的なニュースもありました。

今回の活動を通して得た教訓は数々ありますが、迅速な初動体制の必要性と、それに伴う各消防本部での緊急消防援助隊の出動訓練、各種災害対応訓練等を今まで以上に実施して、出動に即応できる体制を各消防本部が確立することが大切であると改めて強く感じました。また、この貴重な経験を今回出場していない職員に今後の災害対応に役立ててもらえるように広く伝えていきたいと思います。

消防隊員

私は三月十一日に起きた東北地方大震災に緊急消防援助隊の一員として岩手県上閉伊郡大槌町に行きました。災害現場に行く前から、ニュースなどで現場の被害を見ていましたが、実際に大槌町に着くと自分が想像していた事よりはるかに災害現場は壮絶なものでありました。家は流され、電柱は倒れ、堤防は決壊し、また車は横転し、色々な所で火災が起き、町は薄暗くなんともいえない光景でありました。

現場を見た瞬間、正直あまりの津波の被害の凄まじさに「本当に生存者はいるのか？私たちは、この瓦礫の山の中、生存者を見つけることが出来るのか？」という不安にさらされました。しかし同時に、「一人でも多くの人を見つけてやる！どんな状態でも安否を心配している家族の元へかえすんだ！」という気持ちが芽生えた瞬間でもありました。

被災地の活動では、大阪市、堺市が中心となり、山側から海側に向かって、ローラー作戦で人命検索を主に活動を行いました。しかし災害現場は、瓦礫や折れ曲がった鉄骨、木材の山の活動とあって消防の持っている資器材では限界があり、自分の思い通りに行かない活動にむなしさを感じていました。

活動していてもっともつらかったことは、幼い子供の写真、楽しそうに食卓を家族で囲んでいる様子の写真が、被災地のさまざまな場所に流されており、それを見るたびに「この写真に写されている子供や家族は無事に避難できたのであろうか？最悪まだどこかに流されているのではないか？」など色々な想像させられ、胸が痛かったです。

また、人命検索中、高校生位の男の子が「母と父の安否の確認がとれていません。家はここではないのですが、家の看板がここまで流されているので、この瓦礫の下を見てください。」と涙を浮かべながら頼んできました。しかし、瓦礫の下を検索しても見つからず、その男の子に「ここにはいないみたいです」と伝える時、男の子の祈る思いや期待を考えると、かける言葉もみつかりませんでした。

今回、私たちの中隊では残念なことに、生存者の発見はできませんでした。しかし、他の中隊で、発災から四日目にして、要救助者の発見及び無事救出という出来事もあり、私たちのやってきた活動が一つも無駄ではなく、被災者の方々に少しでも明るいニュースを伝えられたとうれしく思っています。

この災害で多くの命がなくなりました。また残された被災者の悲しい顔もみました。一人でも多くの方が笑って食卓を囲んで、家族と普段通りにいられるように、もう一度これから起きる災害に対して、市民一人一人防災危機管理意識を考慮してもらう事が大切であり、また私たち消防職員が1パーセントでも助かる確率が上がる知恵や行動を、訓練や講習会を通じて市民の方々に伝えていくのが、私たちの使命だと感じた災害現場でありました。

消防隊員

私が今回の災害で感じたことは、津波の恐ろしさを改めて実感したことです。家や車など町全体を壊滅させ、人の命まで奪っていきました。

3月11日14時46分頃に東北地方太平洋沖地震が発生し、13日緊急消防援助隊大阪府隊の第

二次隊の一人として、岩手県大槌町へ派遣されました。

大槌町の様子はテレビで見えていましたが、現地に到着し、町全体が瓦礫の山となっているのを目の当たりにし、テレビで見るのと自分の目で見て肌で感じるのとでは、これほどまでに違うのかという惨状でした。

15日から本格的に人命検索が行われ、津波で流された車両の中の検索、倒壊した家屋の瓦礫を取り除いて人命検索をしました。中には亡くなられていた方も発見したのですが、遺体が家族の元へ戻れるだけでも幸運なことだと思いと複雑な気持ちになりました。

現地では天候が悪い日もありました。積雪のため思うような活動ができない日があり、とても歯がゆい思いをしました。それでも活動できる日には、生存者がいることを信じ、全力で人命検索を行いました。

私たち大阪府隊は、19日に引き揚げ、20日の午前7時過ぎに消防本部に帰りましたが、まだまだ被災地の役に立ちたいと強く感じました。

最後に、被災地の方々が、この苦しみ、悲しみを乗り越え1日でも早く、笑顔で生活できる日が来るよう心から願っています。

消防隊員

3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、死者行方不明者合わせて2万8000人を超す未曾有の大惨事になり、16年前に発生した阪神淡路大地震でも死者は6千人強であることを考えると、今回の地震のすさまじさがわかると思います。

阪神淡路大地震の時は緊急消防援助隊の制度はなく、手探り状態で神戸を救えと全国から消防隊員が集まり、人命救助、消火にあたりました。東北地方太平洋沖地震は大津波により人、家、車、船等がいきなり流され多数の人が溺死等で亡くなりました。

救助されたほとんどの人は、波の届かない高い建物の屋上や、水の入っていない家の中で救助されています。阪神淡路大地震では倒壊した建物の中に閉じ込められた人がほとんどであり、今回の地震とは様相がかなり違っていています。

大阪府緊急消防援助隊は、発災から約6時間後に出発、30時間かけて釜石市に到着、人命検索は約42時間後であり生存の可能性72時間まで約30時間、夜間活動はしないので実質2日が勝負でありました。

私たち大阪府隊が、人命検索にあたった地域は釜石市の北にある大槌町で、2名の生存者を救出しましたが、148名のご遺体を収容。まだまだたくさんの人を発見してあげたかったのですが、残念です。

大槌町の人口は約16000人、4月1日現在では死者560名、行方不明者1000人、避難されている方9000人と報道されています。

今後の課題としまして、出場隊が多すぎて現地で活動できない隊が多く見受けられたため、今後は隊の縮小も考慮する必要がある。また長時間走行するため大編隊での移動は、休憩、燃料補給等でかなり時間のロスがあった。

最後に、今後来るであろうといわれている東南海、南海地震に備え想定外の地震であったとい

われないように行政もしっかり対応していくべきであろうと思います。亡くなられた方々のご冥福と、少しでも早い復興をお祈り致します。

消防隊員

3月11日金曜日の地震当日、私は非番でした。16時頃テレビにより津波が町を飲み込んでいく映像を確認しました。非常参集で呼び出される可能性があると思い、予定を全てキャンセルし自宅で待機していました。

私は3月いっぱいまで西分署で勤務していました。当時西分署のタンク車は第1次隊出場でしたので、反対部が先に現場へ赴くこととなりました。

第2次隊で出場すると連絡があった私は、食料や衣類等万全な態勢で行けるよう準備しました。

私達大阪府隊は、岩手県上閉伊郡大槌町で活動することとなりました。岩手県ということで、大阪から約1000kmの道のりがあり、さらに大阪府隊の消防車両も20台以上隊を成して行ったので、現場到着までかなり時間を費やしました。

約1時間に一度サービスエリアで、休憩と燃料補給が行われました。寝ることもできない状況でしたので、かなり疲労は蓄積しました。

大阪府隊でさらに細かく隊を編成して行くことができれば、もう少し早く現場に到着できたのではないかと思います。

岩手県に近づくにつれ、高速道路に亀裂や激しい凹凸も見られるようになり、市街地の電信柱は倒れていました。

現場から約40km離れた岩手県の遠野緑峰高校体育館で大阪府隊は野営を行うこととなりました。到着した当初雪は降り、断水と停電で仮設トイレは3基しかなく劣悪な環境だと感じました。被災した方々は本当に大変だと身をもって実感しました。私達は時間の許す限り人命検索を行い、一人でも多くの方々を救出しなければならないと改めて肝に銘じました。

初めに人命検索を行った新田地区では、大型スーパーの1階から2階までは津波による被害で、多量の木材、鉄筋、自動車が無茶苦茶に折り重なっている状況でした。西分隊がこの日人命検索を行ったのは河川付近の現場で、流された家の跡地や、傾いた家の中、流された自動車の中でした。現場活動の転進の際、別の隊ではありましたが要救助者を1名発見しました。私も通り過ぎる際その要救助者を確認しましたが、頭部から瓦礫の山に突っ込んでいる状態でした。この日私が確認できた要救助者はこの方だけでした。

野営地の遠野緑峰高校に帰着すると、後方支援隊の方々が私達のために食事や暖房設備等の健康管理をして下さり、心身ともに大変助かりました。

翌朝は悔しいですが、私達の隊は待機となり、後方支援隊の方々の手伝いと高校内の掃除等その場でできる限りのことをしていました。



震災から一週間経った最後の人命検索は新町地区で活動しました。見渡す限り津波で流された家々の残骸と平地でした。光景も臭いも強烈でした。

高槻隊が自動車内の要救助者を発見し、救出しましたが亡くなっておられました。かろうじて流されずに残った家の周りで活動している際、要救助者を発見しましたが泥まみれで亡くなられていました。

14時46分には、全ての隊が活動を小休止し、1分間の黙祷を捧げました。

活動終了となり、西タンク1の車両に戻る際、瓦礫の撤去作業をしていた工事の方が、人がいると私達を呼び止めました。現場に行ってみると、重機で痛んでしまった要救助者がいました。顔面は血だらけで足は骨折し、亡くなられていました。

今回の東日本大震災へは、高槻市消防の職員を含め、被災地でボランティア活動等したくてもできない方々の代表で行かせていただきました。どうしても生存者を救出したかったのですが、悔しさと無念さが今も残っています。

後方支援隊の方が2名だけだったので、車両移動中の交代要員、活動等で決断に困るようなことも生じたようです。後方支援隊の中に管理職の方がおられれば、より円滑に活動できたものと思います。

大阪への帰路は、大阪府隊ではなく高槻市と島本町だけの隊でした。その結果、行きの半分の時間で高槻市消防本部に帰着できました。移動の際は、細かく隊を編成していただければ、素早い現場活動に繋がるのではないかと感じました。

最後に、私達の活動に携わって下さったすべての方々に深くお礼申し上げます。

消防隊員

緊急消防援助隊、大阪府隊第6次派遣の一員として平成23年3月13日の13時に高槻市消防本部を出発し、北ブロック集結場所の万博記念公園南第2駐車場に到着。隊列を組み草津パーキングエリアで大阪府隊に合流しました。いよいよ派遣場所の岩手県上閉伊郡大槌町に向け約1000kmの道のりです。機関員も少人数での交代で道路は地震による亀裂や段差、うねりもあり、ほとんどが夜間の走行で緊張の連続、さらに燃料補給、トイレ休憩等で仮眠をとることも出来ません。

岩手県に入り、野営地の遠野市を経て釜石市から沿岸部に近づくと、今までに見たことのない光景が目の前に広がりました。16年前の阪神淡路大震災では家屋の倒壊はあるものの、町並みは残っていました。しかし、今回は町全体が壊滅状態で、あらゆる場所で車両、船は流され家屋は倒壊、被害の甚大さ、津波の破壊力、自然のもたらした猛威に畏怖の念を抱きました。派遣場所の大槌町に到着したのは14日の17時頃でした。この日は日没も近く活動準備と第一陣の引継ぎで終わりました。野営地は県立遠野緑峰高校で大槌町の活動現場から内陸部へ約50km離れた所でした。寝泊りするのには体育館で、当然風呂に入ることも出来ません。食べたいものも食べられません。ほとんどがおにぎりやパンでした。また、余震が相次いで起こり心身の休まる事はありませんでした。私たちにとっては、僅か5日程度の宿泊ですが被災地の人たちは今も終わりのない避難所の生活が続いています。それを思うと耐え難い苦労が懸念されます。

15日は33消防本部約400人を三つの班に分け、活動する区画や時間を割り振りされました。内容は主に人命検索で車両内部の確認、倒壊した家屋の瓦礫を取り除いての搜索でした。重機にも頼ることができず、すべて手作業の搜索でした。この場所は地震が起こる前までは普通の生活をしていたのに、一瞬でこのような状態になるのかとやりきれない気持ちになり、自然の猛威に対する人間の無力さを感じました。

活動を続けていると重複した箇所の搜索が多く、自衛隊等他機関との連携がうまくはかかっていないのではないかと思います。

野営地に帰隊後、同日の10時40分頃、大槌町内で搜索活動を実施していた、大阪府隊の緊急消防援助隊の一員が壊れた民家の中から、75歳女性を92時間ぶりに発見し、県立釜石病院に搬送されたとの情報を聞き、この状況の下「まだ生存者はいるはず」と次の搜索に向け士気は高まりました。しかし、16、17日の搜索は天候が悪く積雪のため活動は一部の隊だけでした。

18日は搜索場所を変え最後の活動です。一人でも多くの人を発見し被災地の役に立ちたいと必死で搜索しましたが発見には至りませんでした。ちょうどこの日が地震発生後1週間という事で、被災地を目の前にして14時46分に1分間の黙禱、今までの思いがこみ上げ目頭が熱くなりました。

19日には大阪府隊の引き揚げ命令がありましたが、派遣隊員一同「まだまだ活動を続け被災地の役に立ちたい」と感じているはずで、長いようで短かった現地5泊、車中2泊の派遣が終了しました。

発災から派遣車両、人員等は131台1機、881名で搜索活動の結果47の遺体が確認されたと記憶しております。

最後に、東日本大震災により多くの尊い命が奪われました。大切な方を失った方々に哀悼の意を捧げるとともに、亡くなられた方々のご冥福と、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

消防隊員

私は、平成23年3月13日(日曜日)に、緊急消防援助隊大阪府隊の高槻市の警手ポンプ隊の第2次派遣隊として、岩手県上閉伊郡大槌町へ派遣されました。

大槌町の様子は、テレビの報道で見えていましたが、現地へ近づくにつれて町が町でなくなっていく姿を目の当たりにして、言葉を失うほどの被害でした。テレビで見えていた光景と自分の目で見るとでは、これほどまでに違うものなのかという惨状でした。

現地では、天候があまり良くなく、積雪の影響で思うような活動ができなかったり、津波警報が発令されている中での活動であったりと、私たちに不利な状況の毎日で、とても歯がゆい気持ちでいっぱいでした。

しかし、このような状況のなかでも、生存者がいることを信じて、全力で人命検索活動を行いました。

私達は、被災地から離れたところにある遠野市というところの高校の体育館を借りて、寝泊りしていました。当然入浴をすることもできません。食べるものもおにぎりやパンなどでした。私達はこういった生活は1週間だけでしたが、被災者の方々は今も終わりの見えない避難所での生

活が続いています。そう思うと、しっかりと食事もとれていた私たちの生活は、十分すぎるくらいでした。こういった生活ができたのも、毎日おにぎりを作ってくださった地元の方々と、生活面を支援してくださった後方支援隊の方々のおかげです。心より感謝しています。

現地から戻ってきた今、個人としてできることは限られているかもしれませんが、一人の人間として何ができるかを考えて、少しでも被災地の力になれることをしたいと思います。そして、今回の震災における緊急消防援助隊として派遣されたこの経験を決して無駄にせず、今後一日一日を頑張っていきたいと思います。

救助隊員

今回の派遣にあたり、第二陣であったため気持ちの準備も身の回りの準備も含めて、十分な時間がありました。

阪神大震災の際は、第一陣での出場であったのと、緊急消防援助隊はもちろんのこと、マニュアル等も無かったので、準備に関しては全く違うものでした。

出場する日にいったん帰宅し、出場の事を伝えると、妻は「東北の人のために頑張ってきて」と、子供は「百人助けや!」と私の肩を叩きながら気丈に伝えてくれました。たぶん出場を予想していたのと思いました。

万博に北ブロックが集結し、大阪府隊の集結場所の草津第二PAを目指し出発した時には、リラックスを心掛けながらも気合が入りました。

それから24時間超の長い道のりを経て、派遣地である津波で襲われた大槌町を目の当たりにした時には、メディア等で見ていた以上の悲惨な状況だと感じました。



私は21小隊からなる、中隊の中隊長という大役を府隊長から命ぜられ、4日間の活動が始まりました。

地震の被害というよりも、津波での被害であるため、普段訓練しているような技術ではなく、瓦礫を手で捲って要救助者を検索する基本的な方法でした。瓦礫の下や車の中から要救助者を発見したのですが、残念ながら生存者を発見することはできませんでした。

次の日も中隊で車列を組みながら、野营地から災害地に向かいました。その道中ですれ違う被災された地元の方が、車列に向かって深くと頭を下げてくださる姿を見て、涙が出てくるのと同時に「絶対に一人でも多く助けてやろう」と気合が入りました。

しかし、発見しても発見しても生存者はなしでした。無力さを感じました。

「30歳代の女性発見！」との声でそちらへ駆け寄ると、隊員たちが泥をかけ分けていました。すると、隊員から「おんぶ紐背負ってます！」との情報でした。と言うことは、付近に赤ちゃんが居るのではと、みんなが赤ちゃんを検索し始めました。

みんなの思いは「せめて遺体であっても親子を一緒にしてやろう！」と言う事でした。

隊員の全員が同じ思いであることに私は感動しました。

しかし残念ながら、1時間ほど検索しましたが発見できず、中隊長として転戦することを隊員たちに伝えるのが辛かったことを思い出します。みんな、ドロドロになりながら必死でしたから。

発災からちょうど一週間の14時46分、大阪府隊の全員が検索中のその場所で一分間の黙禱をささげ、その日の夕刻に私達の派遣隊の活動が終了しました。

毎日、気持ち的にも身体的にも、疲れ果てて野営地に戻るのがですが、後方支援隊の隊員たちの献身的な支援のおかげで、リフレッシュも出来ましたし、体調も崩さず任務を全うすることが出来ました。後方支援隊というのが無ければ、野営地に戻った際に気持ちを切り替える事が出来なかったと思います。

翌朝、帰路に向かうのですが、大阪府隊約400人の連帯みたいなものを感じる事が出来ました。

なかなか生存者を発見することが出来ず、遺体を発見する度に「最後の瞬間はどんな思いやったのかな」と思っていた気持ちを思い出すと、今でも悔しい気持ちになります。

しかし消防士としてはこれからも、このような凄惨な現場を経験していくために、貴重な体験をしたと思います。

最後に私達の派遣に際して、高槻で様々な支援等をしていただいたおかげで、安心して高槻に帰って来れたのだと思います。

ありがとうございました。

救助隊員

「ありがとうございます。」派遣の連絡を受けた時に、私は電話口で言っていました。

テレビでの惨劇を見て、一人の人間として、消防職員として少しでも力になりたい、と思っていたところでした。

翌日から出発することを、看護業務中の妻に連絡すると、一時間後には帰宅し、「派遣されることを考えたら、点滴の針が震えて仕事にならなかった。先生に言って帰らせてもらった。心配だけど頑張ってきて。」余震が続いている現地に行くことを危惧し、涙を流し言われました。

災害現場に到着したのが14日の17時で、発災からすでに72時間が経過していました。高速道路を走行中にも、道路の陥没等の地震の被害を目にしましたが、津波による被害は、私の想像をはるかに超えるものでした。何メートルも積もった瓦礫の山、車や何百トンもあるタンカーが打ち上げられていました。丸3日経っているにもかかわらず、海側一面の瓦礫からは煙が燻り、振り返ると山火事が何箇所も発生していた。テレビで伝わってこない悲惨な現場を目の当たりにし、ここが日本か、と疑いたくなり、この世の地獄を見ました。

1万人以上が行方不明という地区の検索活動であったので、遺体は足元の穴を掘れば見つかるのではないかと、という安易な考えでいました。実際は地面が見えない瓦礫の山と、津波で流されてきた泥が、町全体を覆っていたので、瓦礫や泥をかき分けての検索活動は時間がかかり過ぎる。なので、隙間のある瓦礫は多少かき分けたりしたが、ほとんどが目視と呼びかけでの活動であった。結局、生存者を見つけることもなく無力感を抱きました。

今回の活動では、救助隊員としての技術を活かすこともできず、救助技術が向上したとも思えません。しかしながら、大阪府隊として4日間の活動、野営、被災者との接触、自然災害の脅威を目の当たりに出来たことは、消防という職業だけでなく人生に大きな影響を与えることは間違いありません。

救助隊員

私が現場活動において感じたことは無力感でした。他市の隊員とも話をしたのですが、やはり私と同じ事を感じていました。災害現場へ到着するまでは「自分の力を最大限に出し切って救助活動をしてやろう」という気持ちでした。

しかし、いざ現場活動を始めてみると災害現場の広大さに、どのような検索活動をすれば良いのか困惑しました。できる限り家屋の残骸などの堆積物を除き、声掛けや目視での検索、形のある家屋などへの進入検索など、見落とし等は無いが、必死に行いました。

しかし、どれだけ必死に検索活動を行っても、達成感はなく、無力感だけが残りました。

緊急消防援助隊を終え、通常勤務に戻ってもしばらくこの思いは消えませんでした。ある日「どんな形であれ行方不明の家族が見つかってよかった」という震災遺族の方の記事が新聞に載っていました。その記事を見た時に、何か報われた気持ちになりました。

緊急消防援助隊第六次大阪府派遣隊は二百数十体のご遺体と、一名の生存者を発見しました。一万人以上の方々が未だに行方不明であるなか、ご遺体という形であれ二百数十名の方々だけでも、ご家族と再会させてあげることができました。このことだけでも、私達が活動した意味があったのだと感じました。

災害現場では人と人との絆、特に家族の絆というものの強さと大切さを強く感じました。

それは自分自身の家族にも言えることでした。緊急消防援助隊第六次大阪府派遣隊に出動が決った事を、私が妻に告げると、そのときは差ほど表情も変えることなく「がんばってきて」と言うだけでした。しかしその後、妻は家事をしながら涙を流していました。私にとっても緊急援助隊へ出場することは特別なことでありましたが、防災職員である以上、想定されていたことであり、妻にも今回のような大規模災害が発生すれば出場する旨を伝えていましたし、理解してくれていました。しかし、実際に大きな余震が続き、津波の危険性があるなかへ出場するということが、私達にとっては当然の事であっても、家族にとっては非常に心配で不安なことなのだと、今回の緊急消防援助隊で感じました。

そして、緊急消防援助隊を終え帰宅した際も、妻は涙を流して喜んでくれました。私には守るべき大切な家族がいます。それは皆同じことであると思います。私はそんな市民の皆様の大切な家族を守ることができる職務に誇りを感じます。

今回の震災において、自然災害の猛威と自分の無力さを感じましたが、それ以上に人間の強さと絆の深さを感じました。この経験を糧に、これからも自己研鑽に取り組んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、私達活動隊員を全力で支えてくださいました、後方支援隊の皆様と、高槻市に残って通常勤務に就いてくださいました皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

救助隊員

3月11日発生した東北地方太平洋沖地震に伴い、高槻市にも緊急消防援助隊出場の要請があった。私は、第二陣として出場したが、まず最初にしんどかったのは現地までの道中であった。中5に16人の隊員と資器材が乗り、他消防本部の資器材も乗せることになり、車中は足も自由に伸ばせないくらいの窮屈さだった。

その状況で24時間以上かけ現地入りしたのだが、本当に嫌になる程の状況であった。

現地に入って第一陣と交代するため捜索現場に向かう道中、今までに見たこともない情景が目前にひろがっていた。無造作に重なり合う自動車、逆さまになっている住宅、鉄骨しか残っていない建物、海からは程遠い陸に打ち上げられている船。出場する前、テレビを通して見ていた情景とはあまりにも違い過ぎていて、本当に何も言えなかった。



現場指揮本部が設置されていた大槌町。着いた瞬間の感想は「ここは本来、何があったのか」だった。それぐらい、何がどこにあるかさえわからない状態だった。

2日目から本格的な活動が開始され捜索活動を行った。新田地区という場所の捜索活動だったが、見渡す限り沼地のような状態だった。家は基礎しか残っておらず、所々に瓦礫が散乱していた。自隊としては生存者、遺体救出は出来なかった。他隊が救出しているのを聞き、やはり自分で発見、救出できなかったことが悔しかった。

活動が終了し野営地に戻ると、後方支援隊の方が食事の準備を全てしてくださっていた。

現場から帰ると、安心できる環境が作られており、本当にリラックスできたと思う。これは、後方支援隊の方がいてくださったからだと思う。もし、後方支援隊がなく現場から帰ってから自分達で食事の準備などしなければならぬ状況だったら、もっとストレスやいろんな障害が出ていただろうと思う。本当に感謝したい。

今回の派遣で体感したのは、隊で動く際のコミュニケーションの大切さだった。高槻救助隊は

宇野司令補、山下士長、岸田士長、長谷川消防士の5人だったが、やはりいつも一緒に活動しているからこそお互いの信頼関係もあり、自分の実力も知ってもらっているから、自分にあった役割を与えられて活動しやすかった。野営地に戻ると世間話などを積極的にしてくれて、いつも通りの環境作りをしてくれた。言葉は悪いかもしれないが、バカ話などをして笑う時間もあった。それがあったから大きなストレスや現場での悲惨な状況で気持ちが落ちることがなかったと思う。

今回の派遣で得た経験は誰もができる経験ではなく、何事にも変えがたい経験だったので、今後の消防人生に少しでも活かせるようにしたいと思う。

救助隊員

今回の災害出場に関して、私は大阪府六次派遣隊として、高槻としては第二次派遣隊の救助隊として出動しました。

まず初めに、現場活動に関しての率直な感想としましたら、何処から手をつけていいのかなと思いました。救助隊として、一人でも助けたいという気持ちから、行動一つ一つ全力で取り組む気持ちは大切ですが、「落ち着いて焦らないで行動すること」と隊長に言われ、二次災害や怪我には注意して行動できたと思います。私は、隊の中で拝命も一番若かったのですが、今自分が何をすべきか、何を求められているかを考えて活動に従事しました。

宇野隊長が中隊長に指名されたことで高槻救助隊は山下士長が小隊長となりましたが、的確な指示もあり活動に関しては上手くまとまってきたと思います。また他の所属との連携に関しても、指揮本部、宇野中隊長の指示もありスムーズにできていたと感じました。

私は、宇野司令補、山下士長、岸田士長、坂口消防士と諸先輩方の活動や立場立場での仕事をみて、とても勉強になりました。与えられたポジションを一人ひとりが確実にこなすことの大切さがわかりました。

次にベースキャンプ地での生活については、後方支援隊の懸命な支援により、大きなストレスを感じることもなく、生活することが出来ました。活動隊員のストレスを最小限にしようとして下さっている事が良くわかり、本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。この後方支援隊がいなければ、現場活動ができなかったといっても過言ではないと思います。

また、多くの所属がいる中で、大阪府隊として団結できたのは、大阪府隊長の統率力、リーダーシップ力だと思いました。

最後に、色々な場面でお力添えして下さった方々、災害派遣時に休みなく高槻で活動してくれた仲間に感謝の気持ちを示すとともに、被災地での経験を今後の消防人生に活かしていきたいと思います。

救急隊員

今回、緊急消防援助隊として派遣され今後の活動に対して参考となるかわかりませんが、個人的に感じたことを率直に書いていきます。

私は、阪神淡路大震災のときにも派遣されましたが、そのときは緊急援助隊というものがなく、各市が各々行動しており、派遣が震災後、5日くらい経ったときであったので、ほとんど活動はできずに終わりました。

今回の派遣では3月13日の昼からの出発でありました。まず、感じたこととして移動にかなりの時間を費やしたということです。発生後、72時間という制約があるのは防災関係に携わる人間なら当然分かっていることです。さらに休息、休憩が多すぎることも感じました。ここで無理をして仕事しないといつするのか？それなりの覚悟を持ってこの災害に来たのでは？そして消防、警察、自衛隊等、各省庁の連携が殆どなかったようにおもいます。時間的に見て、救急隊の活動にももっと重点を置いても良かったのではないかと思います。救助、消火が主役であるのは72時間だと思いますし、大阪府隊としても搜索が主であるかのような方針であると感じました。実際、救急隊は病院関係者、地元の消防本部から感謝されていたと聞いています。これは今後の緊急消防援助隊の課題として反省していくことだと思います。

高槻市としては現地での連絡体制、段取りがまずうまくいってなかったと思います。

これ程の災害であるので何もかもがうまくいくとは思えませんが、それぞれの立場も理解できますが、本部、現場とも思いやりのやり取りが必要であったのではないかと思います。連絡体制、意思疎通がうまく取れていなかった。ある程度は事後報告でも構わないと思いますし、それが認められないのであれば、ある程度の判断のできる権限のある職員を派遣すべきだと思います。余計な気を使うことが多く、現場がおろそかになっているように感じました。段取りにしても現場の職員に絶対的な判断を任されている感じではなかったのも原因の一つであると思います。

高槻の隊員についてですが、隊員の資質についても疑問に感じることもありました。なぜかうかれている者も数名見受けられ、自分だけが仕事をしている風に言う者もあり、同じ職場で働いているのが恥ずかしいと思わざるを得ませんでした。数名でもそんな者がいたのでとても全員でやっているという感じにはなりません。一職員として恥ずかしかったです。自分は自分のできる事をしようと思っていました。

こんなときこそ、一丸でかかればいいのか。見栄や建前はではなく本当にやれるべきことを、できることを本当はしたかったと今でも本当に思います。反省すべきことは反省し少しでも今後の参考になればと思います。

救急隊員

私は緊急援助隊の二次派遣隊で救急隊として活動し貴重な体験をさせて頂きました。

被災地は目を疑うほどに変わり果て津波に押し流された町は瓦礫の山と化し、あまりに悲惨な光景であり少しでも岩手県の人のために役に立ちたい、その思いでいっぱいでした。

救急隊は現地の病院が機能を失っているため、重症患者を被害の受けていない他府県の病院まで搬送することが主な任務で、時には瓦礫の中の人命救助、水難救助を行いました。

派遣された全ての隊員が多くを救いたいという同じ目標を持っていたからこそお互い協力し合い、スムーズに活動ができたのだと思います。

釜石消防の救急隊は自分の家、家族、仕事仲間を失い、最悪の精神状態にもかかわらず一睡もせず、ひげもぼうぼうのまま疲れきった顔で働いていました。災害発生から時間がたつにつれ、避難所での急病者の発生に伴い救急の需要が増し、彼らの負担は言葉に表せないほどになりました。私達も彼らの負担を減らすために、一緒に働きましたが大阪の救急隊にまかせておいたらいいなんて一切思っておらず、自分の町は自分で守るんだという強い気持ちが伝わってきました。

次に避難所から救急搬送で同乗した看護師さんの話をさせていただきます。

彼女は災害発生時に病院3階で勤務しており、突然津波がやってきて一、二階で働いていた医者、看護師、患者はみな流されてしまい生き残った患者を屋上に避難させることで精一杯だったそうです。三日経つが身内と連絡が取れず二人の子供の安否確認もまだとのことでしたが、救急搬送開始直前に避難所で子供二人と再会でき、泣きながら抱き合っている姿を見た時、私も涙が出てきました。

やっと再開できたのだから救急隊だけで搬送するのでここに残るように伝えましたが、安否がわかっただけで十分とのこと、同乗しますと答えたため、子供も一緒に乗せていくことを提案しました。でも断固としてこれが私の仕事だから子供はおいていきますと答えるのです。彼女もまた人のためになりたいという強い気持ちと仕事に対する使命感があったのでしょうか。このような逆境に立たされた時、本当に強い人とはこのような人のことを言うのだなと考えさせられました。

今大阪に帰り現場に戻りましたが、現地では働きたくても働けない人がいる、今も寝ずに救護所で苦しんでいる患者のために働いている消防職員がいると思うと、よりいっそう頑張らないといけないという気持ちでいっぱいになります。

最後に緊急援助隊が被災地で全力で活動できたのは、食事の準備、生活環境を最大限に整えてくださった後方支援隊の存在、また職場の協力があつたからだと思っています。本当にありがとうございました。

現場で学んだ経験を今後の消防生活に生かしていきたいと思います。

後方支援隊員

今般、東日本大震災の被災地である岩手県に緊急消防援助隊大阪府隊第6次派遣隊として出動しました。高槻市消防本部としては、発災初日に出動した第1陣第2陣の交代要員として第3陣での出動でした。

活動地の岩手県まで、24時間を越える長時間に亘る出動でしたが、活動地に近づくにつれ、休憩・給油で立ち寄ったサービスエリアでの給油制限、食料等の不足、水・電気の使用制限が増え、じわじわと緊張感が高まっていったように感じました。

現場は各種メディアで報じられているように悲惨な状況でした。中には使命感からか思いつめた隊員やそれとは逆に浮ついているような隊員も見受けられましたが、宿営地の雰囲気は出動前に思っていたよりもピリピリとした緊迫感はないように思えました。理由は色々あるのですが、発災からの時間がある程度経過していたこともあつたのかもしれませんが、ただ滞在時間が長くなるにつれ各隊員の言動の端々に普段とは違うところを感じ、やはり緊張なり不安なりの何か

しらの感情を皆抱えているのだと思いました。

普段の我々の業務である火災・救急・救助では、一般からすれば非日常的なことが頻発します。その中で非日常へのある程度の「慣れ」といったようなものがあると思います。ですが、今回の現場ではその非日常が余りに多く、受けた衝撃は大きかったです。今でも報道で被災地の状況を目にする度、深く考えることがあります。

今回の派遣で様々な経験をする中で、多くの思いや考えを持つことが出来ました。今回の東日本大震災にしても市内で発生する一件の建物火災にしても、規模や範囲に差はありますが被災される方にとってはどちらも同じ災害です。今回経験したこと、考えたことを忘れることなく、これからも業務に臨みます。

後方支援隊員

三月十一日の発災時、私は事務所にて業務に当たっていました。

突然、めまいの様な感覚に襲われ上を見ると看板が揺れており地震だと気付きました。揺れが収まるのを待っていましたが、その間は今まで経験したことのないとても長い時間であり、同時に今起きている地震はただ事ではないと直感しました。

すぐに、情報を得るためテレビを観たところ、津波で襲われる街の様子が次々に飛び込んできており、現実とは思えないほどでした。その後も情報に目を配り、次々と情報が映し出され甚大な被害状況が明らかになるにつれ、「現場にいつか助けたい、何かしたい」という気持ちが沸いてきていました。

三月十二日の昼頃、外出先で第二次派遣隊の後方支援隊として派遣の確認があり、今の自分でも現場に行き何か出来ると思うと迷いはなく二つ返事で承諾し、家族に派遣の事を伝え個人装備等の準備をしながら要請があるのを待っていました。夕方、明日の十三時に出発との正式な要請を受け、昼の間に準備は整えていたので、これからの活動のため早めに就寝しようとしたのですが、気持ちが高ぶり、なかなか眠れなかったのを記憶しています。

三月十三日、本部に集合し二十四時間以上かけ野営地入りしたのですが、辺りは二次災害防止のため安全な場所を選定していたので、まったくと言っていいほど被害がなく、どこで災害が起



こっているのか分からないほどでした。

それからの活動としては、食事準備・掃除・府隊本部と北ブロックとの調整・本部と現地との調整等、野営地の環境を整えるのが主の任務でした。

後方支援隊として任務に当たり、正直毎日現場に赴き一人でも多くの方を救出したいという気持ちがありました。しかし、現場から戻ってきた隊員が「いつも、皆が温かいご飯を用意してくれているから助かります」と言葉をかけてもらったときに後方支援の大

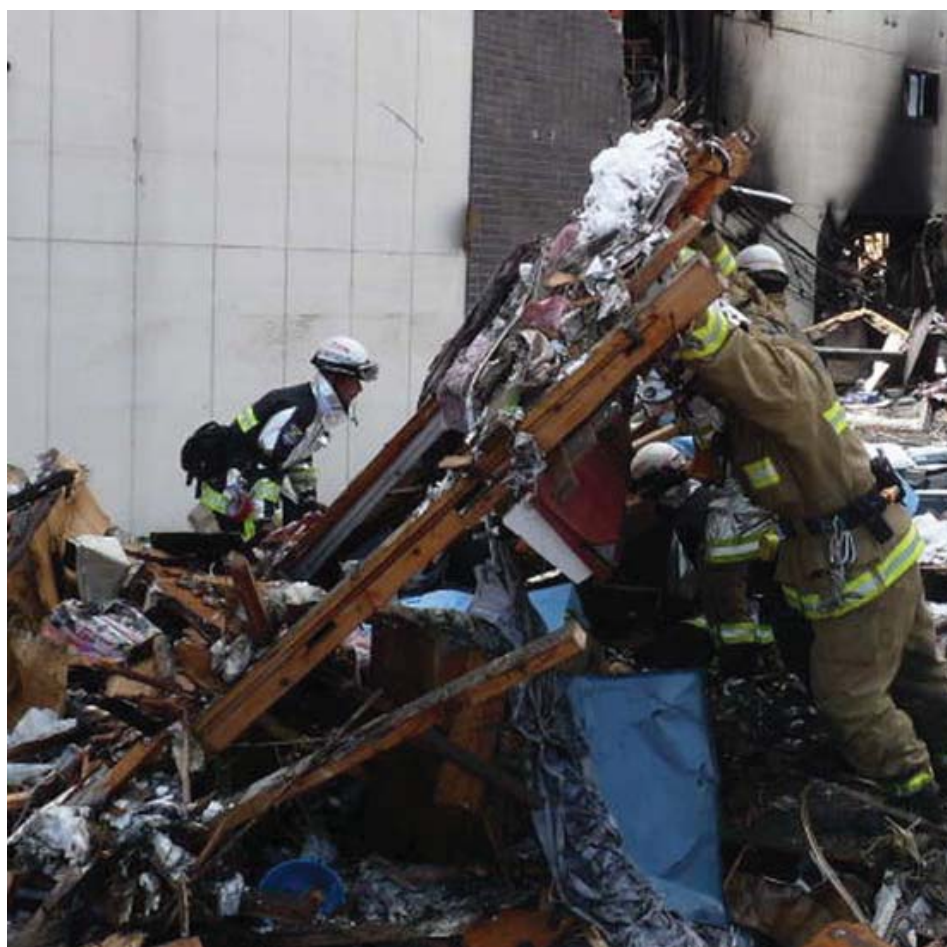
切な役割を感じ、同時に使命感を持つことができました。

私は一度しか現場活動を行っていませんが、現場の隊員が全力で活動できるよう野営地の整備に勤めることで、被災で苦しんでいる方々と一緒に助けっていると信じ任務に当たりました。

結果として、多くの生存者を救出することが出来ず残念な気持ちはありますが、現場でしか得ることの出来ない被災者との交わり、活動隊の姿を肌で感じられたことは今後の消防人生に大きな力になると思います。この経験を無駄にしないためにも後輩に伝えていき、何時また災害が起きても、今以上の活動が行えるよう日々精進していきます。

最後になりましたが、東北地方太平洋沖地震でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に被災された方々ならびに関係者の方々にお見舞い申し上げますとともに被災地の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、派遣に際しご支援頂いた所属の皆様にご心から感謝する次第であり、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。



東北地方太平洋沖地震 緊急消防援助隊 派遣隊員アンケート

部隊名(消火部隊・救助部隊・救急部隊・後方支援部隊)

下記の事項について該当する項目の所感を記載してください。

- 1 発災～出動(指令調査課 大阪府隊情報伝達について)

- 2 発災～出動(派遣部隊 出動準備・出動決定時の対応等)

- 3 出動～大阪府隊集結(出動時の状況・集結方法等)

- 4 大阪府隊集結～現場到着(府隊長からの指示・移動時の状況等)

- 5 現地での実働(消火・救助・救急活動時の状況)

- 6 指揮命令系統及び現場状況の把握について

- 7 後方支援体制について

- 8 2次派遣部隊(交代要員)の出動～現着(集結方法・移動時の状況等)

- 9 引揚時の状況

- 10 体調及び精神状態について

- 11 その他気がついた点、改善すべき点等

【東北地方太平洋沖地震 緊急消防援助隊 派遣隊員アンケート結果】

1 発災～出動（指令調査課 大阪府隊情報伝達について）

- ・ 定期的に情報伝達訓練を実施してきたこと、また、15 日にも訓練が予定されていたことから、北ブロックの幹事として、スムーズに情報伝達ができた。
- ・ 正規のルートではないルートでの情報伝達であったが、訓練等を重ねている成果もあり、特に大きなトラブルも無く出動できた。

2 発災～出動（派遣部隊 出動準備・出動決定時の対応等）

（1）第1・2次編成部隊

- ・ 事前に実施計画を把握していたが、実際出動準備等に戸惑った。
- ・ 第一次派遣部隊の二次隊であったため、車両の燃料補給等出動準備に多少余裕があった。
- ・ 出動決定時には即対応出来た。
- ・ 準備命令前に動き出したが、車両への積載がうまくいかなかった。
- ・ 問題なく迅速に対応できた。
- ・ 前回の兵庫県豊岡市出場時の教訓がいかされていた。
- ・ 資機材の積み降ろし確認作業に少し時間を要した。
- ・ 派遣場所の指示が口頭であったため、情報の出処がわからず混乱した。
- ・ テレビ等で被災地の状況を見れば、出動要請があることが容易に判断できると考える。
- ・ 発災から4時間以上経つての出場要請は少し遅いのではと、疑問に思った。
- ・ できる限り早期に、部内の体制を整えるよう、指示がある方が望ましい。
- ・ 日頃から緊急援助隊に持っていく物のリストを作り準備しておいた方がよい（個人で）
- ・ 東京方面への出動要請だったので、今回の災害の深刻さを実感した。
- ・ 出動準備には相応の時間が必要であり、また、情報が希薄な場合の混乱が発生するため、各出動隊の隊長を含めた出動前のミーティングが必要ではないかと考える。
- ・ 本部に集合した後、出発までに試行錯誤したため持参する物資等で時間を要しました。

（2）第6次編成部隊

- ・ 第6次派遣隊であったので、それなりの対応は出来たと思います。
- ・ 高槻としての二次派遣隊だったので、出動までの時間に余裕があり、個人の事前準備等がしっかり出来た。
- ・ 前日から身の回り等の準備が十分出来た。

3 出動～大阪府隊集結（出動時の状況・集結方法等）

（1）第1・2次編成部隊

- ・ 食料等を購入する余裕が無かった。
- ・ 実施計画どおりされたが、隊数が多かったので、各ブロックごとの集結も考慮する必要があるのでは。

- ・ 今回、吹田市での集合でも時間的余裕がなかった。南方面の集合場所であれば地理不案内も重なりもっと時間を要すると思う。
- ・ 問題なく迅速に集結できた。
- ・ 普段、緊急走行していない他市の道路を走行するので、いつも以上に安全管理が必要。
- ・ 当市消防本部から出発して府隊として万博公園をあとにするまでの約2時間に、現在の被災情報が入ってこない。
- ・ 大阪府下の派遣隊リストなどが情報としてあれば参考になる。
- ・ 集結場所では誘導が最初のうちはスムーズだったが車両が集結していくと雑然となった。
- ・ 後方支援隊資機材については、日勤者滞在時間帯であり、準備等については比較的スムーズに行えたと思うが、今後は、後方支援車に積載する資機材は、誰もが見て積み込みできるよう一覧表を掲示し、資機材については、ラック式台車にセットしておくなどより明確にしておけば、警備課職員がいなくても、中署当務員で用意できるのではないか。
- ・ 後方支援準備資器材等の選定をあらかじめしていたため、積載については比較的スムーズに出来ていた。

(2) 第6次編成部隊

- ・ 隊列が多すぎだと思いました。集結までに時間がかかったのが時間の無駄と感じた。
- ・ 大阪府6次隊は北ブロックのみ万博駐車場で集結し、草津パーキングで大阪府隊と合流した。問題はなかった。
- ・ 北ブロック長として早く集合するべきだと感じた。
- ・ 高槻2次派遣部隊のためしっかりと段取りが出来ておりスムーズに出来た。
- ・ スムーズに資機材の積み込みが完了し、北摂ブロックの集合場所（万博公園駐車場）へ余裕を持って集合することができた。
- ・ 大阪府隊の集合と出発が時間がかかりすぎだと思います。
- ・ 持ち出す荷物を整理しきれず、当日の引き渡しについてもチェック出来ていなかった。
- ・ 最終の持ち出し品リストを作成し、各隊長に渡した方が良い。
- ・ 本部によっては荷物の量が多過ぎて登録車両だけでは積載しきれなかった。交代、増援隊については荷物の量(必要量)を事前調査・調整する必要がある。
- ・ 集結方法(要領)が不明瞭であり本部によっては人任せであったため、集結については情報伝達を含めブロック幹事が取りまとめて行った方が良い。
- ・ 第二次派遣では発災から2日経っており、出勤する際の準備は整っていた。前日に出場命令があったため個人装備、活動に対する心の準備も十分にできた。
- ・ 2次派遣部隊ということで、余裕があった。

4 大阪府隊集結～現場到着（府隊長からの指示・移動時の状況等）

（1）第1・2次編成部隊

- ・ 隊列を組んでの移動だったので、時間がかかったと思う。いくつかの班に分けての行動の方が望ましいと感じた。
- ・ 移動距離が長く、隊数が多く非常に時間がかかった感じがする。
- ・ あまりにも大きな隊で移動するため時間がかかる。
- ・ 道路の渋滞状況や道路状況等の様々な情報をもとに選択された道は、最短時間で到着できる道を選択されており、大阪市指揮支援隊と共に行動していたからだと思う。
- ・ 出勤先が東京から東北に変更となった際、長距離なので心労的に疲れた。
- ・ 震災場所付近の道路状況が悪く、さらに隊数が多く、移動、燃料補給に非常に時間がかかった。
- ・ 隊列を守って一定速度で走行し、また赤色灯を点灯したまま走行するので非常に神経を使った。
- ・ 指揮隊の無線はわかりやすかった
- ・ ブロックごとに別れ給油エリアを分散すれば良かった。
- ・ 無線でのやりとりは必要最低限で行うべき。
- ・ 乗組員（大型機関員）の確保が少ない為、隊員の負担が大きかった。
- ・ 府隊の消防車両が多すぎた為、燃料調達に時間がかかりすぎたうえ、渋滞を招き現場到着の遅延になった
- ・ 高速道路のSA及びPAに立ち寄った時、食事を購入しようと思ったが、既にほとんどの食料が売り切れており、買えないことが多かった。
- ・ 派遣先の変更があったが、派遣隊数を考えるとスムーズであったと思う。
- ・ 派遣先が決定されない内の、出発（移動）であったため、府隊長からの情報もあいまいなものであった。
- ・ 派遣先がかなり遠方であったため、移動手段や途中での休憩など工夫が必要であると考える。
- ・ 隊列を組みながら走行したため、運転に集中しづらい状況だった。
- ・ 適切であったと思います。
- ・ 府隊長指示については、道路地図を用いて次の休憩場所等の事前指示や、各隊の状況等を考慮して移動していたので、比較的良かったと思われる。
- ・ 乗車人員が2名であったため、今回のような遠距離かつ長時間の走行についてはかなりの疲労度があり、精神的・肉体的に厳しかった。
- ・ 出勤車両の確認や無線呼称の確認をもっとしっかりした上で出発したほうが、移動や以後の活動がさらにスムーズになったと思う。

（2）第6次編成部隊

- ・ 隊列が多すぎだと思いました。せめて、ブロックごとに移動するのがベストだと感じ

た。

- ・ 燃料補給に時間を要した。
- ・ マイクロバスでの長時間の移動はきつかった。
- ・ 車両上部に荷物を積載できるようにし、車両内上部にもネット等で積載スペースを確保できるようにして欲しいと感じた。
- ・ マイクロバス（中5）での移動であったのですが、他市本部の荷物（個人の荷物含む）が異常に多くマイクロバスに積載したため、現場到着まで足を伸ばすどころか荷物に肘をかけている状態であった。
- ・ 府隊長からの指示は移動中でも適宜無線で指示があった。
- ・ 災害現場が遠方ということもあり、車中での疲労が大きかった。
- ・ 現地までの移動手段（バス）については、人員だけの計算ではなく、個人装備についても計算に含める必要があると思います。（車内に荷物満載で、24時間の移動は隊員にとって過酷・苦痛でした。）

5 現地での実働（消火・救助・救急活動時の状況）

（1）消火部隊

- ・ 余震や津波警報が、随時に発令され活動は困難であったが、特に問題はなかったと思う。
- ・ 津波や余震などの情報が明確でなかったので活動に支障が生じたと思います。
- ・ 現地での移動及び燃料補給に時間が掛かり実際の活動時間が少なかったかもしれない。
- ・ もう少し滞在日数が多くても良かったと思う。
- ・ 部隊が多数であったため、また検索が広範囲であったため戸惑った。
- ・ 待機時間が長かった。
- ・ 待機時間も多々あり、スムーズに進まないところもあった。
- ・ 部隊が大部隊なので各隊の動作が緩慢になり、もどかしさを感じた。
- ・ 検索活動については一度検索した家をもう一度検索してしまったため、検索に入った家については確認済みのマーキング等の統一を図るべきであったと思う。
- ・ 消火活動については他市と連携しホースを延長し効率の良い活動ができたと思う。
- ・ 現場活動にあっては人命検索がほとんどであったが、実際活動した現場にあっては、瓦礫の山であったので人力での作業に限界があり、もっと瓦礫の下を見たかったのが正直な気持ちです。

（2）救助部隊

- ・ 津波と火災で街が壊滅状態にあり、自分が想像していた活動が出来なかった。
- ・ 余震及び津波警報が継続する中での救助活動ということで、長時間通しての活動が厳しかったが、消防機関による被災者に対しての救援物資等の支援を考慮できたのではないか。

- ・ 照明を使用した夜間での搜索活動もできたのではないかと思う。
- ・ 水害にあった家を検索している時は生存者がいると思い活動できたが、水害と火災で壊滅的な状態の市街地で活動している時は絶望した。
- ・ 現場到着（活動開始）までの時間が長すぎたため、救助隊としての活動が十分に出来なかった。
- ・ 各活動隊に現地の職員を同行させることが望ましい。
- ・ 検索箇所をマーキングするラッカースプレーを各分隊で所有するべきだった。IRT基準のように日本でも基準を作ればよいと感じた。
- ・ 大阪府隊を数隊の中隊編成し、具体的に支持・命令があつて活動しやすかった。

(3) 救急部隊

- ・ 地理が把握できなかつたり、震災で通行できない道路で活動に支障があつたが現地の消防団員の協力が有り何とか活動できました。
- ・ 現地の病院から、遠方の病院への転院搬送、人命検索、救急指揮隊、水難救助を担当したが、二次派遣隊が到着した時期は救急の需要が多くなってきた。
- ・ 今後避難所等での急病患者が増加し、よりいっそう救急隊の増強が必要になってくるだろう。
- ・ 安全や隊員の健康管理を優先しすぎて、もっとできたのではないかと思います。こんなとき無理をせず、いつ無理をするのか。

6 指揮命令系統及び現場状況の把握について

(1) 消火部隊

- ・ 先遣隊の情報が後続隊に旨く伝わっていなかったように思う。自隊が現場の状況を把握したのは現場に到着してからだった。
- ・ 府隊混成であつたため、戸惑つた。ブロックごとの隊編成のほうがよかつたのでは。
- ・ 府県波を使用し指揮伝達は明瞭であつた。
- ・ お互いの無線呼称名がわからず発報しづらい。
- ・ 命令系統はしっかりとできていたように感じた。
- ・ 現地到着するまではほとんど現場の状況はわからなかつた。
- ・ 部隊数の多さからくる指揮命令の大変さはよくわかるが、指揮支援隊の増隊、ブロック分けした中での中隊指揮など現場で臨機応変に指名して、活動隊の掌握と円滑な活動に努めれば、時間を有効にでき、もっと多くの活動を行えたのではないかと思う。
- ・ 其れなりの階級にあるものを情報処理担当者として増員することで、指揮命令系統はスムーズな対応が出来たと思います。

(2) 救助部隊

- ・ 現場活動中知り得た情報は府隊全体で共有し、統制を図るべき
- ・ ラジオからの情報のみで、現場では何人の行方不明者がいて何人の避難者がいるのか

等、一切の情報が入ってこない。

- ・ ただ命令された街区のみを捜索するのではなく、地元住民との連携した中での活動が有効なのではないか。
- ・ 現場での活動初日、情報がほとんどなく、どのような資器材が必要かもわからず、現場まで搬送したが使わない資器材が多かった。
- ・ 重要でない情報に無線を使う隊が多く、情報の選別が困難であった。
- ・ 複数チャンネル使用の検討。
- ・ 小隊長ミーティングでの指示を、無線を通して各隊員が聞けるようにしてはどうか。
- ・ 現地指揮本部の情報が錯綜していた。また、こちらからの問い合わせにも回答がまちまちであった。
- ・ しっかりしていて、活動はしやすかった。
- ・ 現場指揮隊から中隊長へ具体的に地図上で指示・命令があり、理解しやすかった。

(3) 救急部隊

- ・ 適切でよかった
- ・ 現場での待機時間が長かった。
- ・ 大阪市指揮隊、他救急隊との連携もスムーズに実施できた。
- ・ 隊員間でも無線等を使用し情報伝達が十分にできたと思う。
- ・ 各部隊ごとに動き、状況が伝わってないような気がします。

(4) 後方支援部隊

- ・ 当初府隊長からの指示はあったが、それ以後はその場その場の指示ばかりで、現状把握や今後の方針等がわからず、また、通信状態も悪いため連絡等が取れず、合理的な活動ができなかった。
- ・ 後方支援部隊については大阪市消防局が部隊長で、指揮命令系統が一本であったため特に混乱等はなかったが、部隊長である大阪市の方もこちらに遠慮している感じがあり、お互いが遠慮の仕合でうまくいかないことが多かった。
- ・ 現場状況については全体として知る術が就寝前の全体ミーティング及び掲示板しかなく、ブロック長ミーティングや部隊ミーティングをする必要がある。

7 後方支援体制について

(1) 消火・救助・救急部隊

- ・ 少人数であったので、支援隊員一人一人にかかる負担が大きかったと思います。
- ・ 非常時の活動で大変だったと思われませんが、よくしてくれたと思います。
- ・ 安全管理の観点からも移動時3名は必要。
- ・ とても良い対応だと思う。
- ・ 身にしみて重要性を感じた。
- ・ 情報が錯綜する中で、大変な活動だったと思われませんが、よく活動してくれたと思う。

- ・ 非常に充実していたと思う
- ・ 被災地での活動に、今回以上のものは要求しない
- ・ 早期の支援で非常に助かった
- ・ 第一次派遣隊と同時に出動すべきである。
- ・ 食事等は日毎に良くなっていたが、携帯歯磨きやタオルが必要だった。
- ・ 少人数であったので、支援隊員一人一人にかかる負担が大きかったと思います。
- ・ 後方支援の方々の手厚いサポートのおかげで、体調も崩さずしっかり活動できました。本当に有難いです。
- ・ 今回は2名の派遣でありましたが、情報処理担当者を増員してはどうか。
- ・ 現場から野営地に帰着した際、安息させて頂ける環境を用意してくださり、大変助かりました。
- ・ 後方支援なくして現場活動なし、と感じたほどありがたかった。
- ・ 後方支援の隊員の方がいなければ、有意義な現場活動ができなかったと思う。

(2) 後方支援部隊

- ・ 今回のように2名という人数では、第1次で派遣する人数としては人員不足であった。初期段階にあっては現地での設営等にかかなりの時間と労力が必要であるが、それと同時に情報収集や府隊内との調整も非常に重要であると今回感じたため、今後は、その役目を任せられる人員もあわせて派遣するようにしていただきたい。
- ・ 派遣者については、できれば司令級以上をお願いしたい。なぜならば、現地での通信状況を考慮すると、消防本部との連絡方法がない場合もあり、その場で決定せざるを得ない場合が想定されるが、災害実働隊が下すとなると、情報がつかめないまま下さなければならぬため、先に述べたように、情報収集や府隊内との調整をしている人間のほうが、より全体的なものをみて判断が下せるのではないかと。
- ・ 食料については十分すぎるほど充実していた。
- ・ 活動隊員が足を伸ばして睡眠できる場所を確保できなかったことが申し訳なかった。
- ・ 活動に対しての具体的な指示・説明がなく、集散時間や行動内容が分からなかった。具体的な目標の説明と担当の割り振りを明瞭にしてほしい。
- ・ 業務の一部のみを大阪市・堺市以外に割り振っていたが、後方支援全体としての説明も必要である。全体を知らないと現場活動隊への対応が困難である。
- ・ 今回、宿営地での業務のみに従事していたが、現地に現地指揮本部とは別に後方支援所を開設し、現場活動隊員への飲食や情報伝達、資機材管理、安全管理等のバックアップをする必要があるのではないかと。
- ・ 現地での判断・調整事項も多いことと、現地での運営の円滑化を図る必要があると思われるため、現地に緊急援助隊事務所管課の管理職を1名常駐させ、後方支援隊としては3名いる必要があるように思う。
- ・ 本部と現地のやり取りは基本的に現場活動隊長が行うのが良いと思われる。

- ・ 実働部隊が、野営場で滞在している時にストレスを感じないように全力で任務にあたった
- ・ 消防本部との連絡体制の中で何が必要な情報なのか、お互い感じ合えていなかったと思います。お互い情報がないと苛立ちを感じていたように思う。そのため、今後は何の情報が必要かまとめておくべきかと思います。

9 引揚時の状況

(1) 第1・2次編成部隊

- ・ 迅速だったと思いますが、行きも帰りも（片道約26時間）運転をして帰るのは非常に体力的に無理があると思うが非常時のためやむを得ない。
- ・ 機関員が少数であったため負担が大きかったと思う。
- ・ ブロックごとの移動でありスムーズであった。
- ・ 疲れている隊員が運転することになり運転手つきのバスを借りるということも必要ではないか。
- ・ 現地と本部、各本部同士の話が食い違っており、最後の最後までいつ帰るのかわからなかった。
- ・ 個人的にはそれまで十分な睡眠なく、活動等に従事してきたので、事故防止等安全管理の観点からの十分な休養をとらせた後、現地を引揚げたほうが良かったと思う。
- ・ 現場活動後の疲れた状態で引揚げたので、体力的に非常に厳しかったと思う。一晩泊まってから出発した方が良かったのではないか
- ・ 引揚げるのか、1泊するのか、隊員全員が最後までわからずにいたため、引揚げの遅延につながった
- ・ 現地での活動を終え、疲れた状態で隊員が運転していたので、本当に申し訳なかった。自分も運転できればよかったのと思った。
- ・ 各SAでの休憩など、活動隊員が運転しなければならない事を考えると、十分に安全管理がされていたと思う。
- ・ 遠方までの派遣であったため、引き揚げ前の休憩など考慮する必要がある。
- ・ 適切であったと思います。
- ・ 当初予定調整していた帰署日が突然変更となったため、現場がかなり混乱した。他の作業をしていたため何故そのような方向になったのかもわからず、現場が混乱した状況で、しかも北ブロックについても事前調整していたことと違ったため、戸惑いがあった。
- ・ 出発からの活動内容等を考慮すれば1日休息日を設けるべきであり、今回のような強行スケジュールでは、事故があってもおかしくないくらい、各隊員は疲労していた。
- ・ 疲労しているのも分かるが、活動内容や任務、資器材の引継ぎ時間を十分に確保し、2次派遣隊がスムーズに活動に入れるようにすべきであった。結果的に、この交代時

にしっかりと引継ぎができていないがために資器材の紛失や所在が一次不明となることが発生する可能性が高まると思われる。

- ・ 他市本部も含め、すぐにでも帰りたいという意見が多かったが、隊員の疲労度や安全管理面から見れば一泊してから帰ったほうがよかったのではないか。

(2) 第6次編成部隊

- ・ 迅速だったと思いますが、機関員が少数であったため負担が大きかったと思います。
- ・ 機関員の交代がスムーズに行えるよう配慮してほしい。(消防本部全体で人選)
- ・ 北ブロックを小隊に分けて、引揚げたので時間がかなり短縮された。
- ・ 一次派遣隊と違い、朝に出発できたのが良かった。それでも、疲労のある中で長時間の運転は厳しいものがあった。
- ・ かなりの疲労が蓄積していたため、事故を起こさないよう細心の注意をはらい運転した。
- ・ 移動にあっては車両性能の違いもあり巡航速度に差があるため、さらに2, 3台に分けた方が良いと思われる。

10 体調及び精神状態について

(1) 第1・2次編成部隊

- ・ 消防職員である以上、いずれこうゆう事態に遭遇することは覚悟をしていたので精神状態については異常はなし。
- ・ 出発から到着まで28時間、着後車両(ポンプ車)内での仮眠と非常に睡眠不足であった
- ・ 体調及び精神状態は通常でした。
- ・ 長時間の緊迫した状況から開放され、帰宅後に一気に疲れが出た。精神状態は常に安定した。
- ・ 緊張した三日間なので、帰宅後もしばらくは緊張がとれず就寝時すぐに目が覚める。
- ・ 往復の長距離移動、深夜帯からの林野火災の消火活動などおこなっているのにもかかわらず、十分な睡眠がとれなかったことは、事故防止等安全管理上の今後は検討する余地があると思う。
- ・ 体調に異常はなかったが、帰隊後に現地の事が気になった
- ・ 体調及び精神状態ともよかったので、もっと活動に従事したかった
- ・ 時期(季節)の応じた装備、トイレ、食事などのバックアップ体制を構築し、早期に後方支援を実施しなければ、体調管理にも支障をきたすと考える。
- ・ 自宅に戻り少し日がたってから疲れがでたが、その後特に問題なし
- ・ 食欲はあまり無かったが体調は崩すこともなかった。
- ・ 現場での悲惨な状況を見たが、精神状態も乱れることなく活動できました。
- ・ 4日間すべて車中泊となったため、肉体的にはきつかった。

- ・ 北ブロック幹事市としての調整等には苦慮した。
- ・ 睡眠不足による疲労は当然あったが、気が張っているのもあり特に疲労感は感じなかった。

(2) 第6次編成部隊

- ・ 後方支援隊のおかげでまったく問題ありません。
- ・ 寝袋がしっかりしていて、睡眠を確保できたので、体調及び精神状態ともに大丈夫でした。
- ・ 先輩方の助言や寝袋等の防寒具がしっかりしていたので、体調管理、精神状態共に大丈夫でした。
- ・ 個人的には特になし。
- ・ 帰署するまでは気が張ってたせいか、帰宅した瞬間に疲れが出て、筋肉痛等が感じられた
- ・ 気が張っていたため体調を崩すことなく過ごせた。
現地の方々の悲しみ、つらさを思うと、大阪に帰ってきてもよりいっそう頑張らないといけないという気持ちが強くなった。
- ・ 初期では便所の衛生状態が悪く、風呂もシャワーもなかったため、休養も兼ねて近隣の浴場等に定期的に交代で行くようにすれば良いと思う。不衛生な状態では体調面、精神面に不調をきたす要因になるように思われる。
- ・ 隊員に徐々にではあるが疲労が蓄積しているように見えた。引揚や活動内容のスケジュールの明示がなかったことも疲労感を増幅させているように思えた。その点に関する情報提供が少なかった。スケジュールを組むのが難しい状況かもしれないが、交代・休養に関しては仮にしても提示するべきだと思う。

11 その他気がついた点、改善すべき点等

- ・ 移動や行動が、全隊一斉に行われていたので余計な時間を要したと思う。いくつかの班に分けて、行動をした方が時間を有効に使えることが出来たと思う。
- ・ 災害は突発的に起きるものであり、いつ起きるかわからない。常に緊急消防援助隊として出動できる体制を取るという心構えが必要であると実感した。
- ・ 狭い車内に長時間乗っていると、エコノミー症候群の心配があったが休憩の回数及び時間を十分に取ってくれていたのが異常は無かった。
- ・ 隊数が多すぎたので指揮隊は大変だったと思います。やはりブロックごとの活動が今後必要と思いました。
- ・ 今回の災害（津波）に関していえば、必要なのはマンパワーであり消防車両がそれほど必要ではなかった。現地で多くの車両が移動することにより時間をロスし、多くの燃料が費やされた。人員搬送車（貸切バス）が必要であると思われた。
- ・ 消防車両への荷物の積み込みに苦慮した。車両上部に多くの荷物を積みこめるような

仕様にしてほしい。

- ・ 今回、先遣隊は出場時に目的地も分からずに出動しており、現地からの通信機器は使用できないことが多いため、隊員家族への連絡や情報を伝えてもらえると有難い。
- ・ 移動時間が長かったため、結局現地での活動は2日間だけであった。後方支援隊が到着してからは体力的にも随分と楽になり、もっと現地での活動をしたかった。
- ・ 帰隊命令が出された後、三日間の現場活動後に所属本部までの車両の運転は事故防止の観点からも、再度検討の余地があると思う。
- ・ 距離の移動と普段の災害ではないところから精神面での疲労や睡眠時間の少ないところでの肉体面での疲労の蓄積から事故防止等安全管理が不十分であったと思う。
- ・ 隊数が多い中で指揮隊は大変だったと思います。やはり円滑な活動と各隊への情報の共有と周知を図るためにも指揮支援隊の増隊やブロックごとの中隊長の指名など、指揮命令系統の確立が必要だと思う。
- ・ 第一陣は全くの手探りで出場したにもかかわらず無事現地に到着し活動できたことは指揮隊のおかげだと思います
- ・ 消防人としてこういった活動に参加でき良かったです
- ・ 持っていく資機材等に部隊名を記入しておけば、派遣先で困らずに済むと思う。
- ・ 水槽車の給水活動（消火及び被災者への給水）
- ・ 燃料補給車の積極的活用
- ・ 待機時の人員等を使った有意義な戦略（避難地への救援物資及び近況報告等）
- ・ 大槌町以外での分担作業（人員及び車両の混雑防止）
- ・ 地元住民との連携
- ・ 燃料費が予想以上に必要だった。
- ・ 時間との争いである救助活動を迅速に行うため、救助隊の見込み先行派遣等も検討できないか。
- ・ 昼夜を問わぬ救助活動は出来ないのか。
- ・ 集結から引き揚げまで、あらゆる情報を集約し発信する部隊を府隊本部内に設置し、情報を一元化する。
- ・ 自衛隊の活動も見ることができたが、災害に対する行動が熟練されているように垣間見れた。
- ・ 現地から各所属への帰路において、各隊員の疲労が蓄積しているため、事故防止の点から運転手要員の確保が必要であると思います。
- ・ 派遣先が明確でない場合は、今回のように燃料補給に大きな不安があった。資金についても幹部の有志にてまかなっており限度があるため、今後、燃料については予備燃料として燃料缶を多く準備しておく必要があるのではないか。
- ・ 節毎に、保有している後方支援用装備品を実際に使用してみて、オールシーズン使えるものなのか、季節によって使いわけた方がいいのか、検証してみてもいいか。

- ・ 事務担当職員が派遣される場合は、支援資機材等もあらかじめ大体把握しているので特に問題はないが、それ以外の者は、後方支援資機材自体がどんな物かわからないため、後方支援隊として派遣する隊員には、積載リストや集合場所等の詳細を紙ベース（写真付）にして渡せるようにしておく。
- ・ 大型資格を有するものが最優先する編成がこういった事案に関して最適だと感じた。
- ・ 後方支援隊の方の中に、管理職の方が居られましたら、物事がより円滑に進むと思われました。
- ・ 派遣部隊が多すぎて、現場活動がしたくても出来ない隊が見受けられたので、部隊数の編成を考えていきたい。
- ・ 高槻隊の中に、活動隊や後方支援隊の他に司令級くらいで、隊長を置いたほうが北ブロックをまとめるにしても本部との調整にしても、府隊長からの指示にも即応な判断が出来るのではないかと思う。
- ・ 各車両のナビゲーションのデータが古く、現在の道路（高速道路等）が違っていたため、定期的なデータの更新が必要と思われる
- ・ ブロック代表本部として、判断し回答する場面が数回あったと思います。出発から現地でもそうですが、後方支援に2名同行出来るなら、1名はブロック代表になりうる管理職を同行すべきと考えます。
- ・ 出場隊員をあらかじめ決定しておき、個人装備も数量等を定めておけば、準備がスムーズと思いました。
- ・ 他市の車両に故障や不備が発生している中、当市の車両にはそのようなことは起こらず活動に支障をきたすことがなかった。（整備状況）
- ・ 他市に比べ、宿営する面で資機材が充実していた。（資機材保有状況）
- ・ 現地では衛星携帯電話でほぼ通信出来る状態ではなく、衛星携帯電話を使うならば更なる装備の充実（大型アンテナ等）が必要であると思われる。本部との通信用に備えている携帯電話も通信状態が悪く、個人保有の携帯電話の方が通信状態がよかったため、本部保有の携帯電話は更新する期間を縮め、品質の向上を図る必要があると思われる。
- ・ 各人はもちろんのこと、消防本部で常備薬を準備していた方が良い。
- ・ 申し送りの時間をもっと確保して欲しかった。
- ・ 後方支援隊は現地活動隊と出発のタイミングを分け、現地活動隊が実際に現地で活動してから出発した方が良いと思われる。
- ・ 今回実働の管理職を隊長として派遣していましたが、現場では隊の活動を管理するだけでも大変なことで、また、後方支援としても現場で判断しかねる事が様々あったため、次回からは後方支援の中にその場で判断を下せる統括責任者を派遣するべきだと思います。